

藤原京右京一条一坊
発掘調査報告

1997年3月

奈良国立文化財研究所

藤原京右京一条一坊
発掘調査報告

奈良国立文化財研究所

序

周知のように、1300年前、奈良県橿原市には、日本の首都「新益京」があった。藤原京と呼ばれ、今も、大和三山に囲まれた藤原宮の大極殿跡に立てば、周囲の景観は、往時の面影を残している。近世以来、その所在地、範囲については激しい論争が行われてきた。昭和40年代初頭、発掘成果をもとに、京城の範囲についての結論が出たかにみえた。だが、その後、推定京城の外から次々と京内を示す証拠が現れた。

近年、橿原市の都市開発による景観の変貌は著しく、市内の随所で発掘による排土の盛山の光景を見ることがある。平成8年には市内の西北で、京城の東西の端とすることも可能な遺構が見つかり、広大な京の範囲が判明したとする見解もある。

我々の調査部は、本来、宮内の調査と主とするものであるが、時には開発に伴う発掘調査にも柔軟に対応してきた。現在の京の調査は、大路、小路の側溝を発掘することに終始することが多い。

こうした古代都市の上に、商業活動をされるについて、応分の協力を願うことになっているが、株式会社邦清もこれに協力され、遺跡を記録に残すことになった。都市の研究は広範囲に及ぶため、こうしたデーターの積み重ねによって光明される。遺跡が消滅することは、大変残念なことであるが、この報告書は藤原京の1地点のパズルとして重要や役割を果たすことに違いない。

1997年3月

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部長

猪 熊 兼 勝

目 次

I	序 言	
1	調査の経緯	1
2	調査位置と周辺の調査	1
3	課題	4
II	遺 構	
1	周辺の条坊関係遺構	6
2	第81次調査の遺構	8
III	遺 物	
1	土 器	13
2	瓦	26
3	錢貨、金属製品、木製品、その他	28
	付 花粉分析	33
IV	まとめ	38

挿図目次

fig. 1	調査地の位置と条坊	fig.11	S D6801・6802・S E6810・S E7244・
fig. 2	第81次調査区位置図	fig.12	S K7236・S E7240・S K7238出土土器
fig. 3	第60・65次調査遺構図	fig.13	円面鏡
fig. 4	第64次調査第9区遺構図	fig.14	軒瓦・熨斗瓦
fig. 5	周辺の調査位置図	fig.15	金属製品・木製品・鹿角製品
fig. 6	第81次調査遺構図	fig.16	黒漆塗木柄付刀子実測図・X線写真
fig. 7	S E8690出土土器	fig.17	石製品・培塿
fig. 8	S E8689・8650出土土器	fig.18	花粉組成図
fig. 9	S E8664・8665出土土器		
fig.10	S E8685・S K8686・S B8670出土土器		

表 目 次

tab. 1	右京一条一坊南西坪の建物・廬一覧	tab. 3	寄生虫卵分析結果
tab. 2	右京一条二坊東北坪の建物・廬一覧	tab. 4	花粉分析結果

図版目次

PL. 1	第81次調査区全景	PL. 7	1、2、3 井戸 S E8664
PL. 2	1 調査区全景（北西上空から）	4 大土坑 S K8667（北から）	
	2 西区全景（南から）	5 井戸 S E8689（北東から）	
PL. 3	1 西区南半部（東から）	PL. 8 S E8690・8689出土土器	
	2 西区北半部（東から）	PL. 9 S E8664・8665・8650出土土器	
PL. 4	1 建物 S B8675（北から）	PL.10 S E8650・8689・8690出土土器	
	2 建物 S B8670（北から）	PL.11 S E8664・8665出土土器、土馬	
PL. 5	1 東区全景（南から）	PL.12 軒瓦、木製品及び黒漆塗木柄付刀子	
	2 溝 S D8658・8659（東から）	PL.13 金属製品、錢貨、鹿角製品、石製品	
PL. 6	1 井戸 S D8690（東から）		
	2 溝 S D8655西半部（西から）		

例　　言

- 1 本書は、樋原市醍醐町443番地において実施した、藤原京右京一条一坊の発掘調査の報告である。
- 2 調査は、株式会社邦清による店舗増築に伴う事前調査として、奈良県教育委員会の委嘱を受けて、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部が実施した。
- 3 調査は東区と西区に分かれ、面積は合わせて1270m²である。1996年6月12日に開始し、9月20日に終了した。
- 4 調査には、主として毛利光俊彦、寺崎保広、花谷浩、荒木浩司があたり、中川明、森本奈穂、長谷川葉了、上山泰史、飛ヶ谷潤一郎、江上徹英の協力を得た。
- 5 調査にあたって、奈良県教育委員会と株式会社邦清の協力を得た。
- 6 本書の作成は、部長猪熊兼勝の指導のもと、調査部全員があたり、全体の討議を経て、以下のように分担執筆した。I 寺崎保広、II-1島田敏男、II-2寺崎、III-1荒木浩司・西口壽生、III-2毛利光俊彦、III-3松村恵司、IV寺崎。なお、III-1付の寄生虫卵と花粉分析は古環境研究所に委託し、その分析報告を掲載した。
- 7 遺物・遺構の写真は、井上直夫が担当し、小村一郎が協力した。石器の実測・トレースは、水戸部秀樹が行なった。
- 8 編集は寺崎保広が担当した。

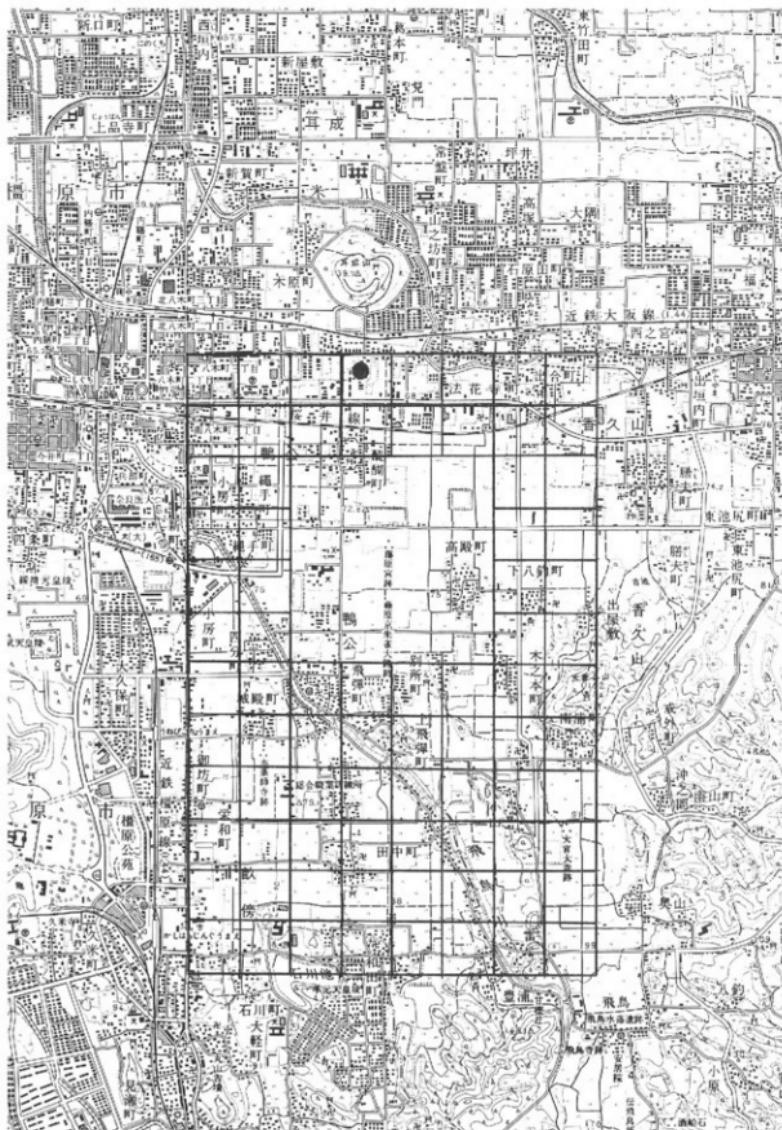


fig. 1 調査地の位置と条坊

I 序 言

1 調査の経緯

1996年3月11日、株式会社邦清は、橿原市醍醐町443番地において店舗増築に伴う発掘届を文化庁に提出した。それを受け、奈良県教育委員会、橿原市教育委員会、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部、および原因者等で協議を重ねた。申請地は藤原宮の北に近接する位置にあり、藤原京関連遺構の存在が予想され、また開発面積も2340m²と広いため、十分な調査が必要と判断された。調査は、奈良県教育委員会が担当し、実際の発掘は、その委託を受けて、飛鳥藤原宮跡発掘調査部が実施することとなった。

調査は、藤原宮第82次調査と名付けられ、発掘区は中央を南北に走る水路を避けて、東区と西区に併せて1270m²を設定し、1996年6月12日に重機による掘削を始めた。掘削は一時中断したが、7月2日に再開、その後16日より作業員による調査を始め、9月20日に終了した。

2 調査位置と周辺の調査

調査地は、藤原宮大極殿跡から北北西に約100m、耳梨山麓のすぐ南にあたり、岸俊男の復元による藤原京の右京一条坊の西北坪に位置する。発掘区は、この坪の東南部に位置する。

これまでに実施された周辺の発掘としては、第60・64・65次の各調査がある。そのうち、条

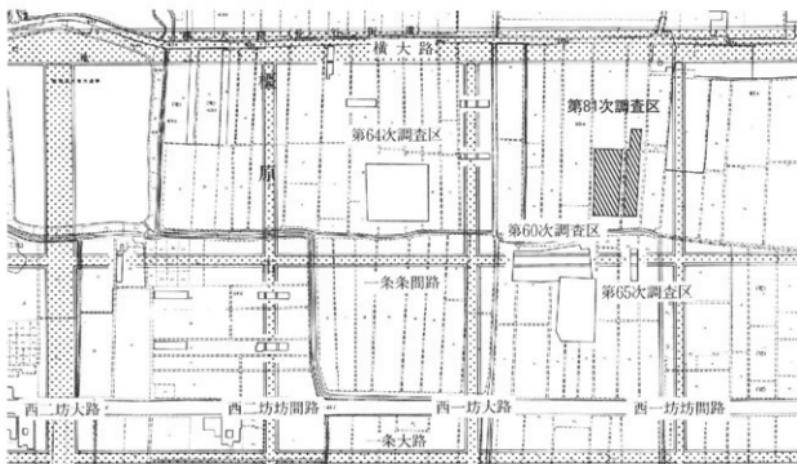


fig. 2 第81次調査区位置図

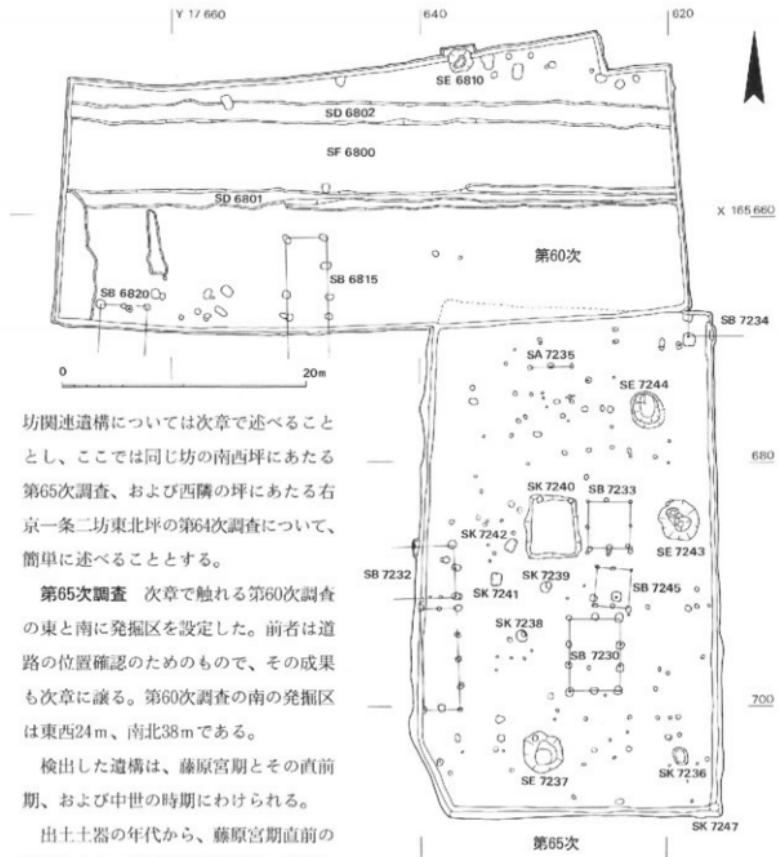


fig. 3 第60・65次調査造構図

坊闊連造構については次章で述べることとし、ここでは同じ坊の南西坪にあたる第65次調査、および西隣の坪にあたる右京一条二坊東北坪の第64次調査について、簡単に述べることとする。

第65次調査 次章で触れる第60次調査の東と南に発掘区を設定した。前者は道路の位置確認のためのもので、その成果も次章に譲る。第60次調査の南の発掘区は東西24m、南北38mである。

検出した造構は、藤原宮期とその直前期、および中世の時期にわけられる。

出土土器の年代から、藤原宮期直前の造構として、建物2棟(SB7233・7245)、土坑1基(SK7240)があり、藤原宮期

の造構は、建物4棟(SB7230・7231・7232・7234)、壇1条(SA7235)、井戸3基(SE7237・7243・7244)、土坑5基(SK7236・7238・7239・7242・7247)である。3基の井戸と土坑SK7236の埋土から奈良時代前期の上器が出土しており、その焼絶は藤原宮期より降る可能性がある。

出土した造物は、土器のほかに墨書き土器、硯、漆付着土器、鰐羽口、砥石、刀子、銅鋤付埴堀、銅滓、銅製品、鋳型、水晶、土馬、埴輪、軒平瓦7点(6641-E・F、6643-A b・C、6646-E、6647-C a・E)などがある。

この坪で確認した建物は藤原宮期と直前期を合わせても8棟と少なく、いずれも規模が小さい。それにもかかわらず、井戸は3基あり、改修の痕跡も見られる。また、遺物では銅製品の工房に関わるものがまとまって出土した点が注目される。

tab. 1 右京一条一坊南西坪の建物・堀一覧

遺構名	規模(桁行×梁間)	柱間寸法(桁行・梁間)	備考
SB7230	3間×2間	7尺・6.5尺	飛鳥Vの土器出土。礎板あり。
SB7231	4間×2間	6尺・5尺	飛鳥Vの土器出土。
SB7232	2間以上×2間	10尺・7尺	飛鳥Vの土器出土。
SB7234	?	?	
SA7235	2間	11尺	
SB7233	2間×2間	6.5・5.5尺	飛鳥IVの土器出土。
SB7245	1間×2間	10尺・4.5尺	
SB6815	3間以上×1間	7.5尺・12尺	第60次調査。建て替えあり。
SB6820	1間以上×2間	?・6.5尺	第60次調査。総柱建物。

第64次調査 条坊関連遺構を中心に10箇所に発掘区を設定したが、ここでは右京一条二坊東北坪内に設けた第9区のみを紹介する。同区は東西41m、南北37mである。

主な遺構は、掘立柱建物24棟、堀2条(SA7130・7131)、井戸2基(SE7165・7160)、土坑

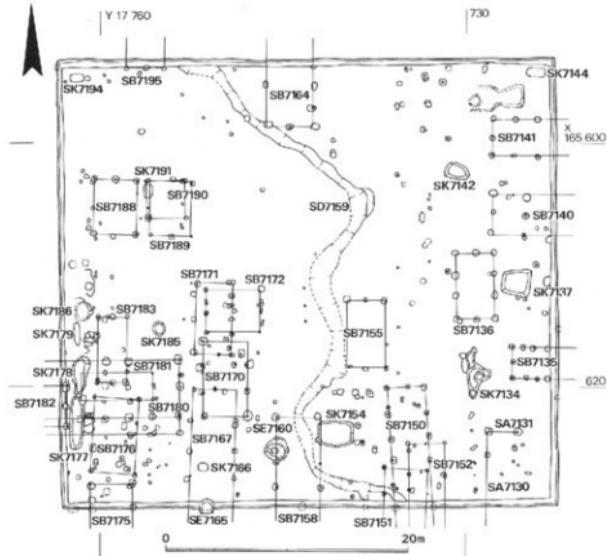


fig. 4 第64次調査第9区遺構図

13基などである。建物と塀の規模は tab. 2 のとおりである。これらは柱穴の重複関係や柱筋などから、少なくとも 3 つの群に分けることができる。第 1 は棟方向がほぼ北を向く建物群で、大多数の建物がこれに属する。ただしこれらの建物間にも重複関係があり、少なくとも 2 時期にわたる。第 2 は棟方向が北でやや西に振れる一群 (SB7150・7170・7180)、第 3 は同じく北でやや東に振れる一群 (SB7135・7167・7171・7176・7188・7189、SA7130・7131) である。したがってこれらは、少なくとも 4 時期以上にわたって建てられたものであることがわかる。

遺物は、藤原宮式の軒丸瓦 (6233B・6273B・6278B)、軒半瓦 (6641F)、墨書き器・漆付着上器・円面鏡・ガラス壺・隨羽口・土馬・有孔円盤・埴輪などの土製品、帶金具・刀子・鉄釘・鉄滓などの金属製品、砥石・石鎚などが出土した。

このように、右京一条二坊東北坪では、小規模ながら多数の建物が数時期にわたって建て替えられて存続していたことが判明した。遺物では、第65次調査と同様に工房に関わるもののが含まれていることが指摘できる。

tab. 2 右京一条二坊東北坪の建物・塀一覧

遺構名	規模 (桁行×梁間)	柱間寸法 (桁行・梁間)	遺構名	規模 (桁行×梁間)	柱間寸法 (桁行・梁間)
SB7135	3間以上×2間	3尺・4尺	SB7172	2間×2間	7尺・6尺
SB7136	3間×2間	6尺・6尺	SB7175	1間以上×2間	6尺・7尺
SB7140	1間以上×2間	9尺・6尺	SB7176	3間×1間	6尺・12尺
SB7141	2間以上×2間	6尺・5尺	SB7180	4間以上×2間	6.5尺・7.5尺
SB7150	5間以上×2間	7尺・5.5尺	SB7181	3間×2間	6.5尺・4尺
SB7151	1間以上×1間	7尺・12尺	SB7182	? × 2間	? • 5.5尺
SB7152	4間以上×2間	4.5尺・5尺	SB7183	3間×2間	5.5尺・4尺
SB7155	3間×2間	6尺・4尺	SB7188	1間×2間	15尺・6尺
SB7158	3間以上×1間	6.5尺・12尺	SB7189	1間×2間	15尺・5尺
SB7164	3間以上×2間	5.5尺・6.5尺	SB7190	1間×1間	9尺・9尺
SB7167	3間以上×2間	8尺・6尺	SB7195	? × 2間	? • 5.5尺
SB7170	3間×2間	7尺・6尺	SA7130	2間以上	9尺
SB7171	4間×1間	3尺・8尺	SA7131	1間	8尺

3 課題

藤原京についての研究は、いま転機をむかえている。かつての定説であった片俊男による条坊復元の外側で条坊相当道路が検出されるようになって久しく、いわゆる大藤原京論がいくつかの復元案とその成立過程の考察とともに提唱され、議論が続くなかった上之庄遺跡の調査で、東西の京極とみられる道路遺構が確認されたのである。これによって、藤原京の東西幅が10世間であったこと

が判明した。これは従来のどの大藤原京説よりも広い範囲となる。こうした成果をうけて、南北長を東西長と同じ10里とみて、その京城の中心に2里四方の宮をおくという10里四方の復元を行なう研究も示されている。その場合、1坊は1里四方で平城宮と同じ大きさになり、宮を除いた部分が96坊を数える。これは平城京の約80坊と比べても大きくなる。

南北長がはたして10里なのか、あるいはこの復元大藤原京の成立時期をいつ頃とみるのか、など検証すべき問題点は多いが、一つの有力な見解であることは間違いない。今後、南北の京極の確認と、時期を決めうる遺構・遺物の山上が待たれるところである。

京城の問題とならんて、京内の都市景観がどのようなものであったか、という大きな課題もある。具体的には京の人口、および京内の利用形態の問題である。

人口に関しては、平城京が10万人ないしそれ以下とみられるが、藤原京については岸俊男の見解があるのみである。岸は続日本紀慶雲元年11月壬寅条に「始めて藤原宮の地を定む。宅の宮中にに入る百姓一千五百五烟に布を賜う」とあることから、藤原京内の宅地が1500戸余であり、その戸が戸房に相当すると仮定すれば9000から1万4000人ほど、郷戸とみれば2万5000から3万人と算出した。これは、かなり幅をとっているものの、現在与えられている資料からの推定としては、おおよそ妥当なところと見て良い。ところが、この説は岸自身の復元する藤原京の場合には、人口密度として平城京に近いものとなるが、大藤原京が認められるとすれば、大いに異なってくるのであり、居住者の希薄な場所が相当にあったと見なければならなくなる。そうした実態を考えるためにも、藤原京の調査事例の積み重ねが必要となってくる。

京内の利用形態を考える場合にも平城京が参考となる。平城京の北端中央に宮があり、その南には官人居住区が拡がるが、貴族は宮に近い北寄りに広い宅地を占めている。一方、南半には小規模宅地が多く、八条には東西市を置き、市周辺には工房が集中して存在したことなどが判明している。こうした傾向が藤原京まで通るのであろうか。平城京との比較において特に注目される場所の一つが、平城京には存在しない宮の北側の坊である。これまでの調査で工房に関わる遺物がまとまって出土していること、藤原京の市は所在地が不明で、宮の北方にあった可能性が指摘されていることなどから、平城京とは異なった配置をとることを示唆する。したがって、以下では、北辺の占地や建物の密集度、工房関係遺物の祛斑りなどに注意したい。そこでⅢ章では81次調査の他に周辺で出土した遺物も一部紹介することにした。

平城京の長屋工家木簡によれば、王家は奈良時代にも、依然として前代以来の所領を保持し、その中には「耳成御田」など藤原京に含まれる上地の経営にあたっていた。遷都によって、宮の組織と建物は移され、あるいは廃絶したであろうが、京内の街区がその後どのようにになったのかは、充分な手がかりがない。第65次調査のように、一部に奈良時代の遺物を含んでいる点は、廃都後の京城を考える際の資料として注目してゆく必要があろう。

II 遺構

1 周辺の条坊関係遺構

1) 周辺の条坊関係遺構 調査区が位置する右京一条一坊周辺では、これまでに第69－5次調査⁽¹⁾で一条大路、第60次⁽²⁾・65次調査⁽³⁾で一条条間路、第64次調査⁽⁴⁾で横大路、第64次・第69－10次調査⁽⁵⁾で西一坊大路、第64次調査で西二坊坊間路を検出している。また、樅原考古学研究所の調査⁽⁶⁾によって横大路が検出されている。各条坊遺構の概要は以下の通り。

一条大路 道路幅は現状で7.5m、南北両側溝間の心々距離は9mである。北側溝は幅1.9m、深さ0.3m、南側溝は幅1.1m、深さ0.2mの素掘溝である。

一条条間路 道路幅は現状で5.5m、南北両側溝間の心心距離は7mである。北側溝は幅1.5m、深さ0.2m、南側溝は幅1.5m、深さ0.3mの素掘溝である。溝の堆積土から藤原宮期の遺物が出土している。

横大路 第64次調査で検出した南側溝は幅1.1m、深さ0.35mの素掘溝である。同調査では溝の北方10mまでの範囲を調査したが、北側溝は検出されず、道路幅は10m以上と推定されている。樅原考古学研究所の調査では第64次調査の東方で北側溝を検出している。溝は幅1.36m～1.81m、深さ0.18m～0.22mである。なお、同研究所ではこの調査区の西方約1.3kmの地点で、南側溝のみを検出しており、報告書では第64次調査で検出した溝を南側溝とすることに対して疑問を呈し、南北両側溝間の心心距離を約36.5mと推定している。

西一坊大路 第69－10次調査で検出した西一坊大路では、道路幅は現状で6.3m、東西両側溝間の心心距離は8.4mである。東側溝は幅2.3m、深さ0.4m、西側溝は幅1.6m、深さ0.35mの素掘溝である。第64次調査で検出した西一坊大路では、道路幅は現状で7.5m、東西両側溝間の心心距離は8.4mである。東側溝は幅0.9m、深さ0.3m、西側溝は幅0.9m、深さ0.1mの素掘溝である。いずれの側溝からも飛鳥Vの土器が出土している。

西二坊坊間路 道路幅は現状で6m、東西両側溝間の心心距離は6.5mである。東側溝は幅1.5m、深さ0.5m、西側溝は幅1.1m、深さ0.3mの素掘溝である。

2) 各条坊遺構の位置関係 藤原京の条坊遺構は、その方位、道路間の距離とも、京全体で厳密に一定しているわけではない。したがって、条坊遺構の方位や条坊間の距離の厳密な検討は別稿に譲り、本報告では周辺の条坊遺構に限定した考察にとどめる。

条坊の方位 この周辺での同一道路で最も離れた2地点は、69－12次調査と64次調査で検出した西一坊大路の2地点である。この2地点から算出される道路の方位は国上方眼方位に対して、北で0度11分西へ振れている。また、第60次調査で検出した一条条間路の方位もほぼ等しく、この周辺での道路の方位はほぼ国上方眼方位に対して北で西に0度11分振れています。



fig. 5 周辺の調査位置図

道路間の距離 上記の道路間の距離を、全ての道路の方位が国十方眼方位に対して北で西に0度11分振れていると仮定して算出すると、一条大路・一条条間路間が約129.2m、西一坊大路・西二坊坊間路間が131.6mとなる。一条条間路・横大路間は、64次調査検出の東西溝を横大路南側溝とすると142.8m、横大路の復原を樋原考古学研究所の報告書にしたがうと139.8mとなる。西一坊坊間路・西一坊大路間の距離は周辺の調査成果からは確定出来ないが、大路間の距離を750大尺とすれば、大路・坊間路間は134m程度となる。

第81次調査の位置 今回の調査区は坪内の東南部に位置する。坪の東西中軸線は、発掘区の西外側およそ10mの位置にある。南北中軸線は発掘区の北端、SD8658のやや南に位置する。

註

- (1) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報23』1993年
- (2) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報20』1990年
- (3) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報22』1992年
- (4) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報22』1992年
- (5) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報23』1993年
- (6) 奈良県立樋原考古学研究所『新益京横大路発掘調査報告書』1993年

2 第81次調査の遺構

1) 層序 層序は、上に盛土が40～70cmあり、その下に水田耕作土（厚さ20～40cm）、床土（20～30cm）、暗灰色ないし暗灰褐色土があり、地山にいたる。地山は、黄灰色の粘質土であるが、東区南端および西区東南隅の部分は灰色シルトである。暗灰色ないし暗灰褐色土の層は、10cmほどの厚さで、調査区の全面を覆うものではない。同層には若干の遺物を含むが、この面から掘り込まれているのは近世以降の遺構である。遺構は基本的に地山面で検出した。遺構面は現地表下90～110cmで、標高約64.9～65.4mほどである。南東から北西に向かって緩やかに傾斜している。柱穴などは底が浅く、全体的に後世の削平をうけているものと判断される。

2) 遺構 検出した主な遺構は、建物9棟、井戸6基、土坑5基、溝3条、塀3条である。これらは藤原宮の時期の遺構と、それ以外（弥生時代、中世）に分類できる。なおその他に、調査区全域にわたって、東西、南北に多数の溝が検出されたが、これは近世以降の水田耕作に関わる溝であり、同じく近世以降の土坑もふくめて、原則として記述と図示を省略した。

藤原宮期の遺構 以下では建物、塀、井戸、土坑、溝の順に述べる。

SB8640 東区の南辺に東西方向に三個並ぶ掘立柱の柱穴で、径30～50cm、深さ10cmある。柱間は7尺で、南北棟の北妻にあたるか。

SB8645 東区の南半西寄りにある掘立柱建物。梁間2間、桁行3間の東西棟に復元できる。柱間は6.5尺等間で、柱穴は径30cm、深さ25cmである。

SB8646 SB8645の北にある掘立柱建物。梁間2間、桁行2間の南北棟で、建物の方位が北で東に振れている。柱間は梁間が5尺、桁行が6尺。柱穴は径50cm、深さ15cmである。

SB8669 西区西南隅にある掘立柱建物。発掘区の西壁と南壁に柱穴を確認できる。梁間2間以上、桁行3間以上の東西棟となるか。柱間は梁間、桁行とも5尺。柱穴は径70cm、深さ10cmと浅く、東から3個目の穴は削平されている。

SB8670 SB8669の北で、やはり西区西辺にかかる掘立柱建物（PL.4-2）。3間×2間以上の縦柱建物となる。南北の柱間は6尺。東西は6.5尺。柱掘方は、今回の発掘区の中では大きいほうで、一辺75～100cmの方形ないし、径80cm前後の円形を呈する。深さは10～15cm。東側柱の南から2個目の穴は削平されている。柱穴から飛鳥IV～Vの土器が出土した。西区南半は断ち割りを行なった結果、柱穴の残りが浅く、全体に旧地表面が削平されていることがわかる。

SB8675 西区西辺中央部にある掘立柱建物（PL.4-1）。2間×2間の南北棟である。柱間は梁間5.5尺、桁行8尺ある。柱穴は径60～70cm、深さは15～20cmである。

SB8676 SB8675と重複する位置にある掘立柱建物。梁間2間、桁行3間の南北棟である。柱間は梁間7尺、桁行6.5尺ある。柱掘方はSB8675より小さく、径70cm、深さ10cm、切り合い関係からSB8676の方が新しい。

SB8680 西区西辺北寄りにある掘立柱建物。2間×3間の南北棟で、中にも柱穴がある。その大きさから見て、縦柱というより、床束ないし間仕切りと見るべきであろう。柱間は梁間6尺、桁行は南2間が7.5尺、北1間が5尺ある。柱穴は径30~40cm、深さ15cmである。

SB8691 西区北辺にある掘立柱建物。2間×2間以上の南北棟か。柱間は梁間7尺、桁行は8尺である。柱穴は径30cm、深さ25cmである。

SA8660 西区北辺から東にかけて、東方に延びる掘立柱塀である。柱間は10尺等間に復元できるが、西区の土坑SK8686と重複する部分は判然とせず、この間は10尺で割り付けることができない。柱穴の径は30~40cm、深さ20cmである。後述する東西溝SD8658と平行する位置にあることから、一連の施設の可能性がある。

SA8668 西区東辺にある南北方向の掘立柱塀。3間分を確認した。柱間は7尺で、北端の柱穴には柱根（残存長45cm、径10cm）が残っている。柱掘方の径は30~50cm、深さは20~30cm。

SE8650 東区中央付近にある井戸。掘方は径1.5mの円形で、遺構面からの深さが1.6mある。井戸枠は抜き取られている。平瓦・熨斗瓦・藤原宮期の上器などが出上した。

SE8664・8665 東区の北にある2基の井戸。当初は1基の不整形な土坑と考えて掘り下げたところ、藤原宮期を中心とした土器とともに、和同開珎銅錢が1点出土した。この最上層を除去したところ、2基の井戸が重複していることが判明した。新しい方がSE8664、古い方がSE8665である。SE8664（PL. 7-1、2）は、掘方が東西1.35m、南北1.2mの隅丸方形で、深さが1.7mある。井戸枠は方形の縦板組で、各辺一枚板を用いている。上端の残りが悪く全長は不明ながら、残存長約150cm、幅約50cm、厚さ約3cmである。その底近くの内側に1辺45cmの井桁に組んだ木枠があり、中から外枠を支えている（PL. 7-3）。外枠の東西2箇所にホゾを設け、それが内側の井桁の上に当たり、両者を固定させている。井戸の掘方から軒平瓦6641-Fと藤原宮期の上器が出土した。SE8665は、掘方が径2.3m、深さが1.5mある。井戸枠は抜き取られており、残存しない。埋土からは、藤原宮期の土器が出土した。

SE8689 西区中央付近の井戸（PL. 7-5）。掘方は円形で径1.9m、深さが2.75mと深い。一辺60cmの方形で縦板組の井戸枠がある。縦板は一辺各3枚よりなり、1枚の長さは最も残っているもので2.3m、幅20cm前後、厚さは約3cmである。縦板の内側で、下から約二分の一ほどのところと、中ほどのところに径約7cmの丸棒を井桁に組んで、外枠を内側から支えている。埋土には軒丸瓦6273-B、熨斗瓦、人頭大の石などが含まれる。土器は大半が藤原宮期に属するが、奈良時代中期のものが少量含まれる。

SE8685 西区北半の井戸。掘方は円形で径1.3m、深さが1.4mある。掘方はすり鉢状に掘り下げているが、底のほうは周辺の地山が崩れた様子で、外側に張らみ、断面形はラスコ状を呈す。発掘時に便所遺構の可能性も考えたが、寄生虫卵分析の結果、そうではないことが判明し、井戸と判断した。井戸枠は抜き取られており、埋土からは軒平瓦6643-D、棟原石、藤原宮期

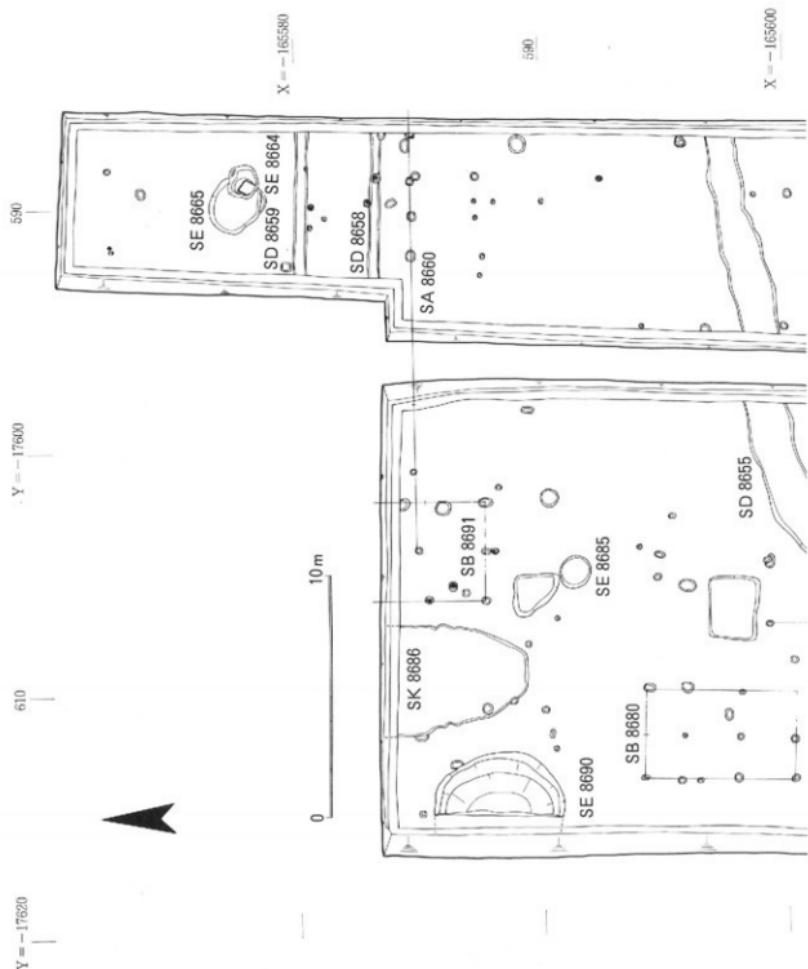
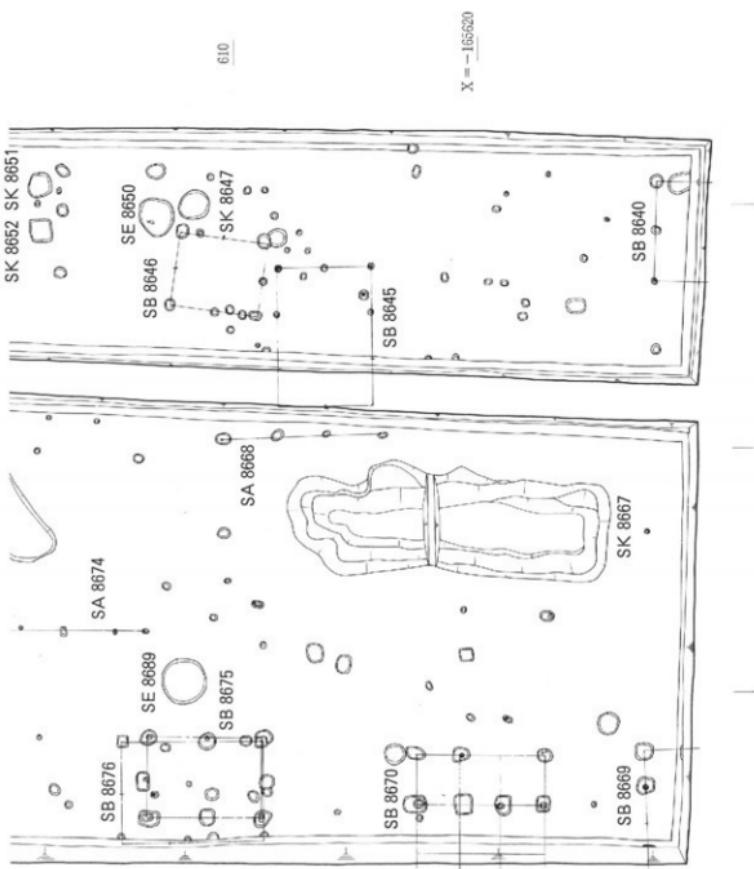


fig. 6 第81次調査造構図



から奈良時代前半の上器などが出土した。

SE8690 西区北西端の井戸 (PL. 6 - 1)。東半分を掘りあげたが、規模は径5.3m、深さが1.4mある。井戸枠は抜き取られている。坪土から熨斗瓦の他、多数の土器が出土した。土器の大半は藤原宮期であるが、奈良時代前半のものも若干混じっている。

SK8647 東区中央やや南寄りにある円形の土坑。径1.2m、深さ20cmである。

SK8651 東区中央東にある円形の土坑。径1.0m、深さ15cmである。

SK8652 SK8651の西にある方形の十坑。一辺1.0m、深さ10cmと浅い。

SK8686 西区北辺にある長楕円形の土坑。東西が4.5m、南北は5.7m以上になる。深さ15cmと浅いが、藤原宮期の土器が多く出土した。

SD8658 東区の北にある東西溝。幅40cm、深さ15cmである。

SD8659 SD8659の北でこれと平行して流れる東西溝 (PL. 5 - 2)。幅50cm、深さ10cmである。発掘区の全面にわたって検出した多数の溝のうち、この2条のみを古代に遡ると考えたのは、一つはその埋土の特徴である。他の耕作用溝の埋土が暗灰粘質土ないし黄褐粘質土であるのに対して、2条の溝はともに暗茶褐色土であり、やや砂質土に近い。また、造構の切り合い関係でも、当然ながら周囲の耕作溝に切られている。遺物は、土師器の小片が1点のみであり、断定はできないが、その方位が正東西であること、両者の間隔が溝の心々間で10尺となることなども根拠となる。これらが古代の造構だとすると、坪の中を区画する溝の可能性がでてくる。前節の検討によれば、一条条間路・横大路の心々距離は約142.8mとなり、坪の南北心は、一条条間路から北に71.4mの位置にくる。これは、SD8658の0.3m南にあたっており、ほぼ坪を南北に二等分していると言える。また、SD8658の南1.5mに溝と平行する掘立柱塀 SA8660についても同様で、南の区画の北辺の扉と見ることもできよう。

藤原宮期以外の造構 弥生時代の溝と中世の大土坑および塀がある。

SD8655 西区中央付近から東区を横切り、さらに東にのびる溝状の造構である (PL. 6 - 2)。ただし、西端は急な傾斜で立ち上がりつておらず、止まっている。溝幅1.5~2m、深さは70~80cmある。溝の堆積土は四層に大別できるが、その最上層の黒灰褐色土から、多くの弥生式土器が出土した。下二層からはほとんど遺物が出土しなかった。

SK8667 西区東南にある楕円形の大土坑である (PL. 7 - 4)。南北13.5m、東西4.5m、深さは1.0mある。埋土は暗灰色ないし灰褐色の粘土である。遺物は少なく、造構の性格や年代を確定しがたいが、わずかに瓦器が出土したことと、土壤分析の結果、藤原宮期の井戸 SE8685とは周囲の環境が大きく異なるということから、この大土坑は中世に降る造構と推定した。水溜用の施設かとも思えるが、性格についてはなお不明である。

SA8674 西区中央付近にある南北方向の掘立柱塀。4間ある。柱間は右「不揃い」であるが約6尺である。柱穴は径20cm、深さ5cmしか残っていない。柱穴の一つから瓦器が出土した。

III 遺 物

1 土 器

石京一条一坊西北坪の東南部に位置する第81次調査で出土した土器は総量で整理箱16箱程度と少ない。大半が飛鳥IV～Vの藤原宮期前後の井戸・土坑などから出土した土師器・須恵器で、他に斜行溝SD8655出土の弥生時代後期の土器、楕円形土坑SK8667出土の13世紀前半の土師器・瓦器・白色釉陶碗、小溝群等出土の黒色土器・瓦器などが少量ある。ここでは、藤原宮期前後の遺構出土土器を報告し、併せて同じ西北坪内の第60次調査の井戸および一条条門路側溝、西南坪内の第65次調査の井戸・土坑出土土器を概述することとし、弥生土器、平安時代以降の土器等については割愛する。なお、土器の時期区分、器種名、調整手法名などは『飛鳥藤原宮発掘調査報告II』、『平城宮発掘調査報告VII』などに準拠し、適宜追加する。

1) 井戸 SE8690出土土器 (fig. 7-1~30, PL. 8, 10) 整理箱4箱。すべて井戸棒抜取穴出土。大半が藤原宮期の土師器・須恵器で、奈良時代前半の土器がわずかに含まれる。埋土は上下2層に分かれるが、土器の内容は明確には分かれない。

土師器 器種には杯A、杯B、杯C、杯G、杯H、皿A、蓋、鉢A、高杯A、横瓶形小壺、小壺B、甕A、甕B、甕C、鍋、瓶があり、製塙土器片が1片ある。杯A (13・14) は底部外面をヘラ削りし、口縁部外面を粗くヘラ磨きするb₁手法で、内面は底部にラセン暗文、口縁部に2段の放射暗文を施す。13の底部外面に×の針描きがある。他に奈良時代に降る1段放射暗文の破片があるが図示できない。杯C (9~12) は底部のヘラ削りと口縁部外面のヘラ磨きを省略したa₁手法。口径15.8cmのC II (12) と口径13~14cmのC III (9~11) がある。10・11は口縁端部の外側が沈線状にへこむのと内面を黒色処理している点で特異である。大型の杯 (15) はb₁手法で左傾する放射暗文を口縁端部まで施す。分厚い底と砂を多く含む胎土が通有の杯Cと異なる。口径19.2cm、器高3.6cm、径高指指数20.3。皿Aには、a₁手法で1段放射暗文をもつ (17) と、底部外面を粗く削った後に外面全面をヘラ磨きするb₁手法で、内面底部をハケメ調整の後、二重のラセン暗文を施す (18) がある。18は内清気味の口縁部、石英粒を多く含む胎土が異例である。底部外面に「×」の墨書きがある。蓋 (16) は大きく扁平なつまみをもち、口縁端部がわずかに肥厚する。頂部は5分割にヘラ磨きし、内面とつまみ上面とにラセン暗文を施す。口径21.4cm。口縁部をヨコナデするだけの杯G (2・3) は口径10~11cm。3には灯明痕跡がある。暗茶灰色を呈し粗製である点で皿G (1)、小壺B (4~6)、横瓶形小型蓋 (7) と共に通する。小壺Bは扁平な体部に外反する短い口縁がつく。口径6~9cm前後の小型品である。4・5は外面をハケメ調整し、内面はナデ調整。6は体部外面をナデ調整、内面をヘラで撫てる。横瓶形小型蓋は4・5と同じ調整で内面には粘土の継ぎ目が残る。体部長

8.8cm。製塙土器（8）は口径9cmで外面に手掌紋が残る。甌・鍋は多量にある。小片のため図示できないが甌Aには体部内面をナデ調整する「大和型」に混じって、体部内面をヘラ削りする「河内型」などがある。

須恵器 器種には杯A、杯B、蓋、椀A、鉢、高杯、平瓶、壺、甌などがある。杯Aには法量の違いによるA III₁とA IV₂がある。A III₁（27）は丸底気味で厚い底部の外面を丁寧にロクロ削りする。口径14.6cm、器高5.5cm。A IV₂（28）は底部ヘラ切り不調整。杯Bには法量による

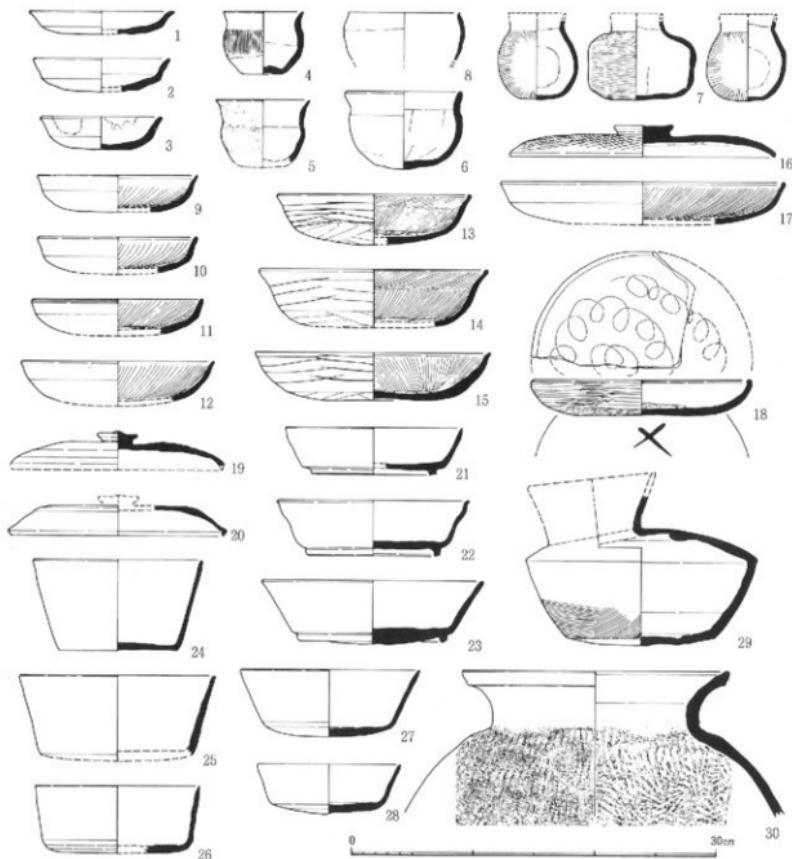


fig. 7 SE 8690出土土器

B II、B III、B IVがあり底部へラ切り不調整が多い。B IV (21) は口径14.5cm、器高3.9cmで低日の高台がつく。杯B II (23) は分厚い底部が高台より下に重れる。硬質で灰白色、東海地方の製品。なお、B IIIに灯明痕が残るものがある。杯B 蓋 (19・20) は扁平な宝珠形のつまみがつき身受けのかえりはない。ともに内面を硯に転用する。なお、かえりをもつ蓋は下層出土の1点のみである。椀Aには半底から直立気味に開く24と、丸みをもって口縁部に至る25・26がある。24の口径13.8cm、器高7.4cm。平瓶 (29) は肩部に稜のつくやや高い体部と広口の口縁部からなる。体部外面下半を粗くハケメ調整したのち底部周縁部をヘラ削りする。体部径19cm。甕 (30) は直立気味に開く短い口縁の端部が三角形に肥厚する。内面の当て只は年輪の浮き出た木口に放射状に刻み目を入れた「車輪文」である。白灰色で砂を多く含む。甕には他に直立する短い口縁部をもち肩部に円形浮文を貼り付けたものなどがある。

2) 井戸 SE8689出土土器 (fig. 8-31~42, PL. 8, 10) 整理箱1箱。方形継板組の井戸枠内から上師器杯A、杯B、杯D、蓋、高杯A、壺、甕A、須恵器杯A、杯B、同蓋、平瓶、横瓶、壺、甕Aが出土。大半は藤原宮期に属すが、埋土上層に33・39など奈良時代中頃に降るものが少量含まれる。掘形出土器には土師器杯A、甕、須恵器杯A、鉢Aなどがあり、須恵器杯A (40) や上師器杯A片は藤原宮期に属す。

土師器杯A Iにはb₁手法で口縁端部の肥厚が小さい31や大きく巻き込むように肥厚する32などがある。31は口径18.4cm、器高4.8cm、径高指數27前後。32は口径19.4cmで共に藤原宮期に属すが、31が古い様相をもつ。33は口縁部内面に1段放射暗文と連弧暗文を施し、口径20cmで平城宮II期に属す。甕A (34) は内湾気味の口縁の上端に面をもつ。体部内面下半はオサエ、上半はナデ調整。外側全体に煤が付着する。甕A (35) は「河内型」であるが内面下半部をナデ調整する。口径17.8cm、器高18.0cm。須恵器杯Aには口縁部と底部の境に丸みのある杯A (36) と、角張った杯A II (37) があり、ともに底部はロクロ削り。杯B IV (39) は低い高台が底部の縁邊につき、口縁部が斜め上方に直線的に開く。口径13.2cm、器高4.1cmで底部はヘラ切り不調整。平城宮III~IV期に属す。杯B 蓋 (38) は口径16.5cm。やや高い宝珠形のつまみの上面に「×」の墨書きがある。横瓶 (41) は成形時の下半部は平行叩き目と同心円當て其痕からなる叩き成形であるが、上半部は叩いていない。甕A (42) は口径16.8cmの直立気味の短い口縁をもつ。底部外面と口縁部~頸部の内面が磨滅している。体部径27.3cm、器高28.9cm。

3) 井戸 SE8650出土土器 (fig. 8-43~51, PL. 9, 10) 井戸枠抜取穴からの出土で整理箱1箱。器種には上師器杯A、杯C、杯H、皿A、壺A、甕B、須恵器杯A、杯B、同蓋、平瓶、横瓶、壺、甕などがあり、土師器銚・甕類、須恵器壺・甕類が多い。いずれも藤原宮期に属す。

土師器杯A I (45) はb₁手法で比較的密な2段放射暗文。口径17.0cm、器高5.0cm、径高指數29.4。杯C II (43・44) は口径13.6cm、器高2.9cm。甕A (46) は口縁端部外側に面をもち、体部下半内面を縦ハケメ、上半から口縁部を横ハケメ調整。口径16cm。甕A (47) は茶褐色の

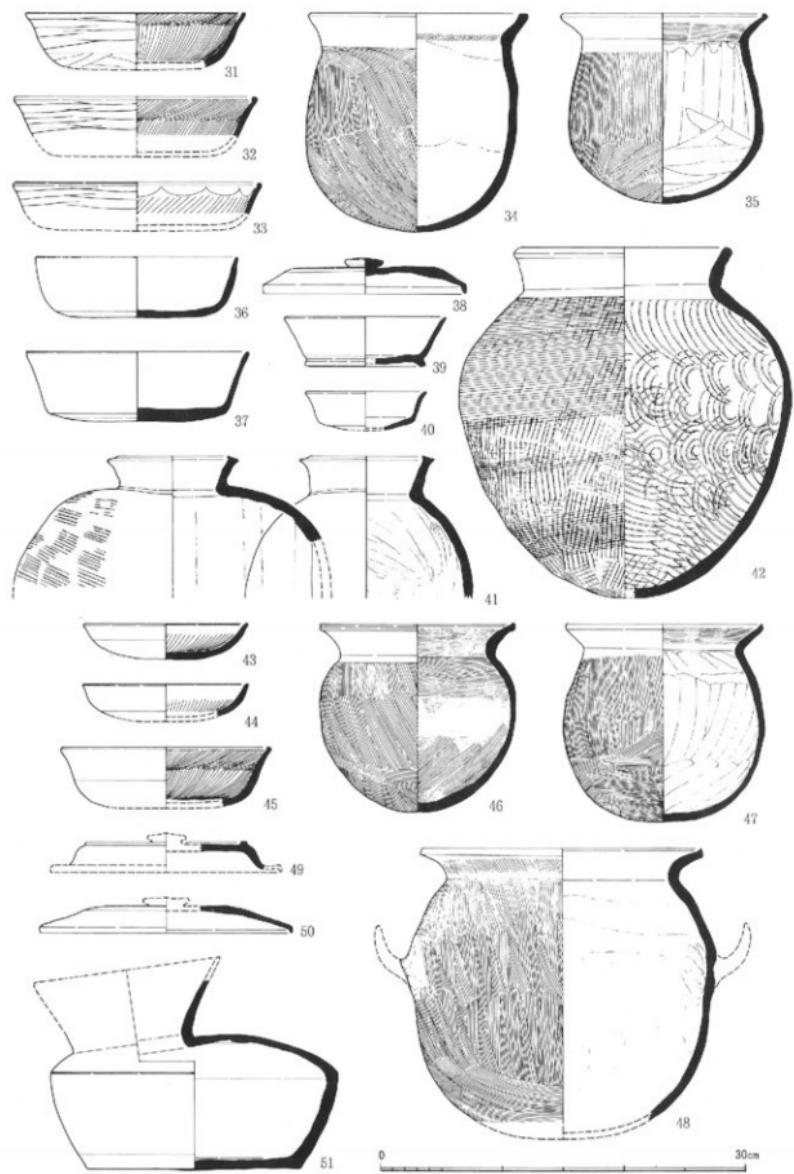


fig. 8 SE 8689 • 8650出土土器

緻密な胎上で体部内面をヘラ削りする「河内型」。口径16.0cm、器高16.3cm。壺B（48）は体部内面上半を横に、下半を縦にナデ調整するが、所々に成形時の当て具痕跡が残る。口径23cm。須恵器杯B蓋（49）は頂部の周縁に高台状の突帯が巡る。器形から体部に稜をもつ杯類の蓋と思われる。類例は陶邑古窯址群のT G33・55・71号窯などにあり、藤原宮期前後の上器と伴出するが、本例は外面の濃緑色の自然釉や胎土からみて陶邑古窯址群の製品ではない。半瓶（51）は丸みのある頂部に広い口が開く。底径17.5cm、体部径23.6cm。

4) 井戸 SE8664・8665出土土器 (fig. 9 - 52~66, PL. 9, 11) 2基の井戸は検出当初、1基の不整形な土坑と認識しており、その段階で出土した遺物には和同開珎銅錢1枚と土師器杯A、杯C、皿A、蓋、鉢、壺、須恵器杯A、杯B、同蓋、高杯、壺、甕等がある。掘り進める内にSE8665の井戸枠を抜き取った後、SE8664が構築されており、検出当初の土器にはSE8664廃絶時までの土器が混在することが判明した。和同開珎の出土位置はSE8665井戸枠抜取り、SE8664掘形のいずれかであるが、両者の土器は互いに類似している上、比較的良好な接合関係にあって区別できない。そこで、土坑段階の土器とSE8665抜取穴及びSE8664掘形の土器、SE8664井戸枠内の土器とに分けて記述する。

土坑段階の上師器杯C II（64）は口径13.6cm、器高3.3cm、径高指数24。口縁端部内側の面が広い。飛鳥IV～V期。須恵器杯B II（66）は分厚く重ね下がった底部をもち、口径17.0cm、器高3.2cm。飛鳥IV～V期に属す。これに対して須恵器杯B III（65）はヘラ切り調整の底部と直線的に開く口縁部との境に低い高台を巡らせる。SE8689の39と類似し平城宮III期に位置づけられる。口径15.2cm、高さ4.5cm。65は出土土器の中で最新の資料であり、SE8664の廃絶を平城宮III期におくべきことを示している。

SE8665抜取り及びSE8664掘形出土土器（52～55・62）には土師器杯A、杯C、杯H、皿A、蓋、高杯、鉢、壺A、甕B、須恵器杯A・椀A・杯B・同蓋・高杯、壺などがあり、いずれも飛鳥IV～V期に属す。土師器杯A I（52・53）はb₁手法で、口縁端部を小さく肥厚させ、2段放射暗文を施す。口縁部が直立気味の52は暗文が粗く、外傾度の大きい53は密な暗文である。口径18～18.5cm、器高5cm前後。径高指数27～28.5。皿A I（54）はb₁手法で口縁端部を小さく外反させる。口径22cm。甕A（55）は済曲する口縁部の内面をハケメ調整し、外端部に面をもつ。体部内面は横方向のナデ調整。口径16cm。須恵器杯B II（62）はSE8664掘形出土で外方に躊躇張った細い高台と口縁端部の小さな肥厚が特徴的。東海地方の製品であろう。ロクロ削りの底部外面に「川」字状のヘラ記号がある。口径17.8cm、器高4.3cm。

SE8664井戸枠内出土土器（56～61）は大半が最下層からの出土で、器種には土師器杯D、杯H、皿A、壺、甕C、須恵器杯A、杯B、同蓋、平瓶、壺、甕などがある。土師器甕体部や須恵器甕口縁部の細片が多い点でSE8685と類似する。土師器杯D（56）は内済気味の口縁の端部が内側に肥厚する。b₁手法で内面に暗文をもたない。口縁部の内外面に「×」の

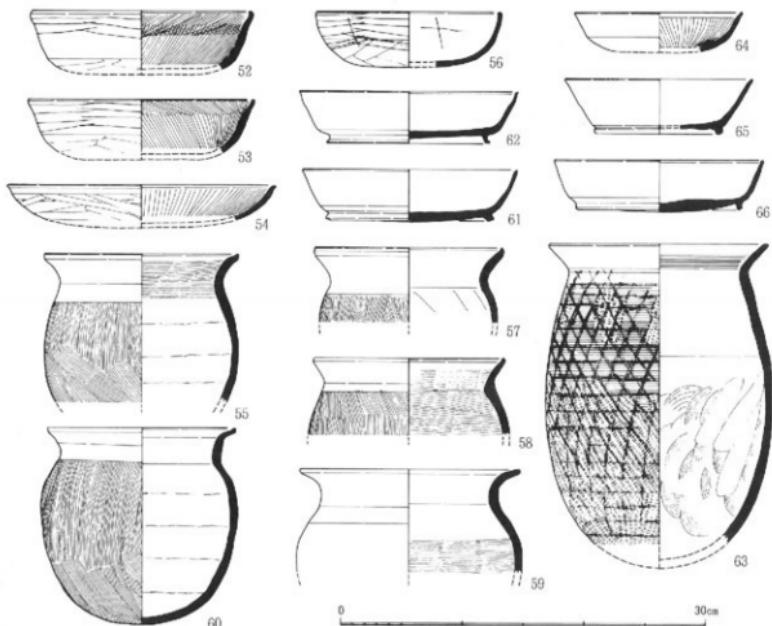


fig. 9 SE.8664・8665出土土器

針書きがある。口径15.0cm、器高4.5cm。壺A（57～60）はほぼ同大であるが、内面をヘラで横方向に撫でる57、横方向ハケメ調整の58・59、横方向に撫でる60などがあり、口縁部の形態も多様である。58は胎土と口縁部の特徴からも「近江型」。「大和型」の60の体部外面には全体に煤が付着し、内面には一方に偏った焦げ付きがある。壺C（63）は須恵器の技法で作ったいわゆるロクロ土師器壺で、体部全体を叩き成形した後、上半部外面をカキメ、内面をナデ調整する。体部内面下半には微かな同心円の當て具痕が残る。淡黄灰色を呈する還元炎焼成で軟質。北陸地域に顕著な分布を示す器種であるが、藤原宮・京城の飛鳥Vの土器群に2・3の出土例がある。頸部以下の体部外面に幅3mmの植物質を粗く編んだ籠の痕跡が残り、釣り下げる使用したとみられる。須恵器杯B（61）は厚い底部に比べて細い口縁部からなる。底部外面はロクロ削りのちロクロナデ。口径17.5cm、器高4.2cm。

5) 井戸SE8685出土土器 (fig.10-67~74, PL.10) 整理箱半量。大半が井戸抜取穴出土で、器種には土師器杯A、杯C、壺B、壺、須恵器杯A、杯B蓋、壺、壺がある。土師器杯Aには時期を異なる三者がある。内面に2段放射暗文を施す69は飛鳥IV～V期。1段放射暗文と連

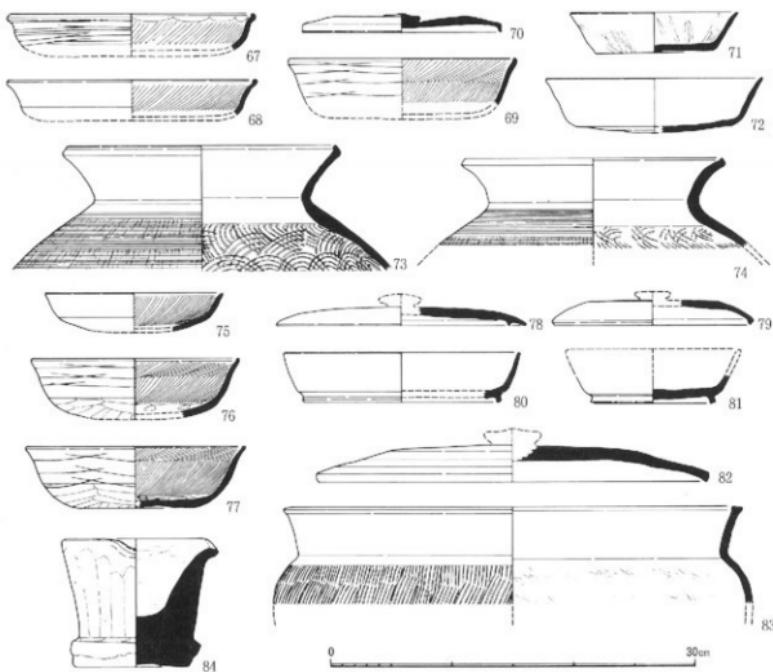


fig.10 SE 8685・SK 8686・SB 8670出土土器

弧暗文を施す67は口径20cmで平城宮II期。1段暗文で外面のヘラ磨きがない68は同III期。抜取穴最上層の須恵器杯A(71)は平底から斜め上に開く器形で底部はヘラキリ未調整。内外面に火襷きがある。平城宮III期。なお一部残った掘形埋土には飛鳥IV～V期に属す土師器杯A等が数片含まれている。

6) 土坑 SK8686出土土器 (fig.10-75～83) 整理箱1箱。器種には土師器杯A、杯C、杯D、杯G、杯H、皿A、甕、瓶、須恵器杯A、杯B(81)、同蓋、椀B、皿B、同蓋(82)、高杯、鉢、甕などがあり、供膳具が目立つ。土師器杯Cには口径14.6cm、器高3.2cm、径高指數22で飛鳥IV～V期に属すC II(75)のはか、径高指數28～32で外面を磨く飛鳥II～III期に属すものがある。杯A(76・77)はともにb₁手法でヘラ磨きが粗い。須恵器蓋には杯B I蓋(78)のようにかえりをもつものが少量含まれるが、大半はB III蓋(79)のようにかえりをもたない。蓋(82)は口径31cmで大型の皿Bに伴うもの。甕(83)は端部の肥厚した大きな直口。外面は平行叩き目、内面はナデ調整で平滑。

7) 建物 SB8670出土土器 (fig.10-84) 柱穴から飛鳥IV～V期の上師器杯A、杯B、杯C、皿Aなどの小片とともに、瓦を思わせる胎土と焼成の揃り鉢（84）が出土した。厚い器壁の平らな底部と斜め外方に直線的に開く口縁部からなり、片口につくる。外面は口縁部を縱方向に、底部との境を横方向にヘラ削りする。内面には使用時の擦痕が横方向に残る。

8) 一条条間路 (SF6800) 側溝出土土器 (fig.11-85～101) 整理箱4箱。北側溝 SD6802出土土器が南側溝 SD6801出土土器よりも多い。器種には土師器杯A、杯C、杯B、杯G、皿A、高杯B、小壺B、甕A、甕B、甕C、鍋、甑、竈、須恵器杯A（99）、杯B（94・95・101）、同蓋（91～93）、杯G、椀A、椀B（97）、皿A（100）、鉢A、大盤A、短頸壺、提瓶、長頸甕、平瓶、甑、甕などがある。いずれも飛鳥IV～V期に屬し奈良時代の上器は明確ではない。

土師器杯A I（85）はb₁手法で口径18.6cm。皿A（86）はa₁手法で口径22.6cm、器高2.6cm。小壺B（87・88）は口径6.8～7.2cm、器高4.1～5.2cm。完形品。甕A（89）は内面をヘラ削り、外面を細かなハケメ調整する「河内型」。短い口縁の甕X（90）は体部内面粘土上の継ぎ目が残る。甕は裁頭円錐形をなす体部の一側面を方形に切取り、その両側と上部に庇を貼り付ける。口径20cm、高さ20cmの小型品と口径25cm以上、高さ約40cmの大型品がある。須恵器蓋（91）は頂部外面に「□〔都カ〕□」の墨書をもち、92は内面を鏡に転用している。杯B（94・95）は底部ヘラ切りで踏ん張り気味の高台をもつ。杯G（98）は底部ヘラ切り。杯A（99）は底部ロクロ削りで無蓋の器種。口径15.2cm、器高4.2cm。椀A（96）は直立する口縁部の端部外面が凹む特徴をもち、猿投窓の製品と思われる。口径13.4cm、器高6.4cmで有蓋の器種。杯B（101）は白灰色で薄手。口径27.6cm。杯部下半をロクロ削りし、径17cmの高い高台がつく。

9) 井戸 SE6810出土土器 (fig.11-102～107) 整理箱1箱。一条条間路北側溝に近接した井戸の抜取穴。器種には土師器杯A、杯D、杯G、皿A、鉢A、小壺B、甕A、甕B、甑、須恵器杯A、杯B、同蓋、壺、甕があり、いずれも藤原宮期に属す。杯D（102）はb₁手法だが底中央部に木葉痕が残る。杯G（103）も同様の器形であるがa₁手法。皿A（104）はa₁手法で86と類似し、後述の120（b₁手法）よりも浅い。皿A、杯Gとともに底部に木葉痕が残る。甕A（105）はSE8664の60に類似した口縁だが内面はハケメ調整。口径13.6cm、器高11.3cm。須恵器杯B（107）は垂れ下がる底部の周縁に低い高台がつく。口径16.6cm、器高4.6cm。蓋（106）は外径15.9cm。口縁端部内面に灯明痕がある。

10) 井戸 SE7244出土土器 (fig.11-108～116) 整理箱2箱。右京 一条 一坊西南坪北端の井戸で、北半を逆L字形の縱板組に改修する。器種には土師器杯A、杯B、蓋、杯C、皿A、高杯A、鍋、甕A、B、甕、甕、須恵器杯A、杯B、蓋、皿、椀A、壺、甕がある。土師器では杯A・Bが多く、鍋、甕、甑、甑、甕などの存在も特徴的である。杯Aにはb₁手法で2段放射暗文（109）のほか、平城宮II期に属す1段放射暗文+連弧暗文（108・110）が少量ある。杯B（112・113）は径高指数28前後で外面を密に磨く。蓋（111）は口径15.8cm。内面に大きなラセ

ン暗文を施す。須恵器蓋（114）は厚い頂部と薄い端部が特徴的で、奈良時代に降る可能性が強い。杯A（115）は口径16.4cm、器高4.0cm。口縁の上1/3の内外面に灰が被り、同一器種の重ね焼である。杯B I（116）は薄手でシャープな口縁部。東海地方の製品。井戸は平城遷都前後に改修され、奈良時代前半に廃絶したと思われる。ほかに土馬・転用硯・坩堝に使用した土師器などがある。

11) 土坑 SK7236出土土器 (fig.11-117~121) 5袋。器種には土師器杯A、杯C、杯G、皿A、甕A、壺B、甕C、須恵器杯A、杯B、蓋、鉢A、甕がある。藤原宮廃絶時～奈良時代初めに属す。杯A I（118）はb₁手法で2段放射暗文。口径20cm余。杯A II（117）はa₁手法で口径11.4cm。杯C（119）は藤原宮期の特徴をよく示す。皿A（120）はb₁手法で104よりも浅いが放射暗文は粗い。土師器甕Aは口径16cm、器高14cm前後で内面をなでる「大和型」が多く、口縁部が大きく肥厚する。須恵器鉢A（121）は端部近くを強く撫でる特徴がある。灰白色を呈する東海地方の製品。

12) 土坑 SK7240出土土器 (fig.11-122~128) 5袋。浅い皿状の方形土坑で、他の土坑・井戸と異なり、飛鳥Ⅲ～Ⅳの土器が土体で、飛鳥Vがわずかに含まれる。器種には土師器杯A、杯C（123）、杯H（122）、皿A（125）、皿II（124）、鉢A、台付鉢、高杯B、高杯H、甕A、壺B、甕C、甕X、壺、須恵器杯A、杯B、杯G（127・128）、蓋（126）、壺、甕がある。土師器杯A、須恵器杯Bは少なく、他に漆皿に使った土師器杯やフイゴ羽口、鋳型がある。工房に関連した土器群であろう。

13) 土坑 SK7238出土土器 (fig.11-129~130) 2袋。土師器杯A、甕A、甕B、小壺B、須恵器杯B、碗Bがあり、藤原宮期に属す。土師器杯A（129）はb₁手法で2段放射暗文だが径高指数23と浅い。碗B（130）は口径20.8cm。底部は丁寧なロクロ削り。高く踏ん張る高台がつく。底部外面にヘラ書き「□〔部カ〕」がある。東海地方の製品であろう。

14) 井戸 SE7243出土土器 (fig.12-131~148) 整理箱5箱。多くは飛鳥V期に属すが埋土上半部に平城宮II期に属すものがある。器種には杯A、杯C、杯B、蓋、皿A、皿H、高杯A、鉢A、甕A・B・C、鍋、竈、須恵器杯A、杯B、蓋、碗A・B、皿B、鉢A、高杯、平瓶、甕などがあり、墨書き土器、土馬、フイゴ羽口が伴出する。土師器杯Aには藤原宮期に属す136のほか、平城宮II期に属す連弧暗文をもつ小片がある。杯（131）はb₁手法で杯A Iに似た法量をもち、132はa₁手法で杯Cに似た器形であるが、いずれも内面に暗文を施さない。杯A、杯Cを模倣した粗製の杯で藤原宮東内濠SD2300などに出土例がある。蓋（134）は口径23.2cm、皿Bに被る。皿A（135）はa₁手法で、口縁端部の巻き込みが大きい。平城宮II期。鉢A（137）は口縁部内面に長い1段放射暗文、底部をハケメ調整した後にラセン暗文を施し、口縁部外面を密に磨く。甕A（138）、甕C（139）はともに体部内面をヘラでなでる。須恵器杯A（145）は浅手で底部ヘラ切り不調整。杯B（143・144）は底部の内寄りに踏ん張った高台を付けたもの

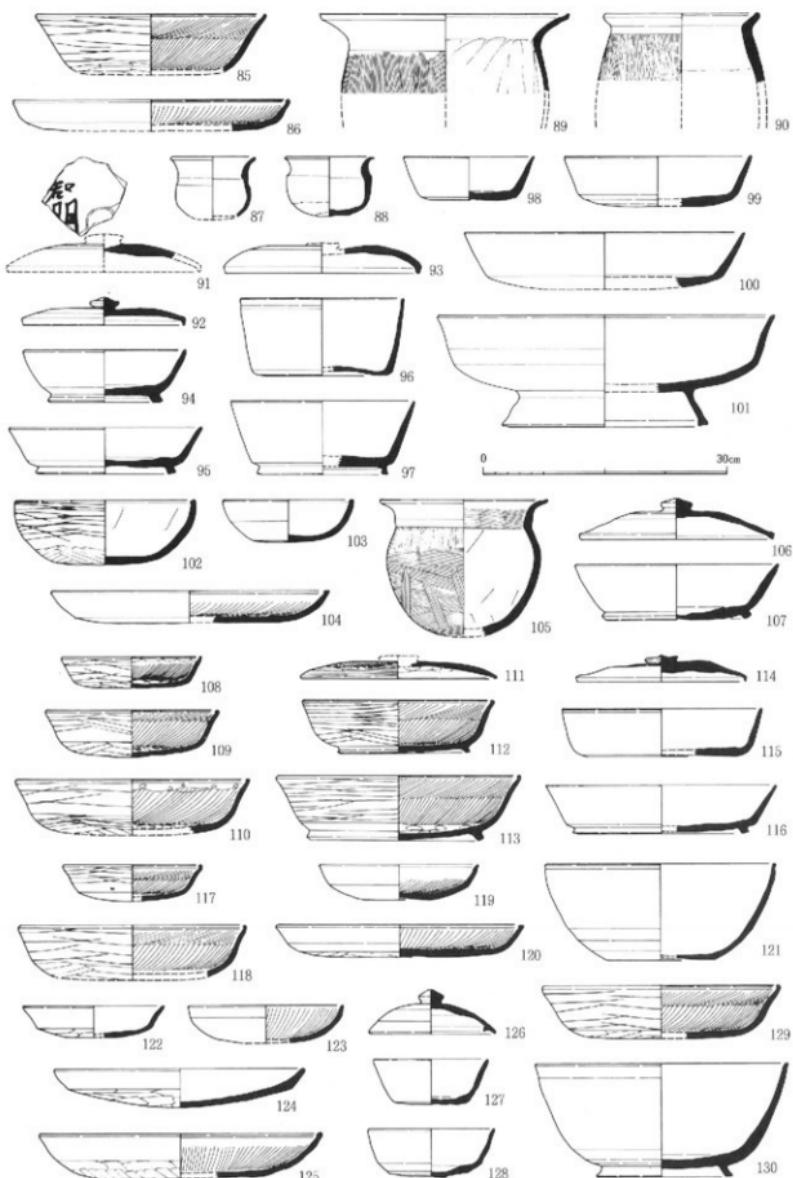


fig.11 SD 6801 • 6802 • SE 6810 • SE 7244 • SK 7236 • SE 7240 • SK 7238出土土器

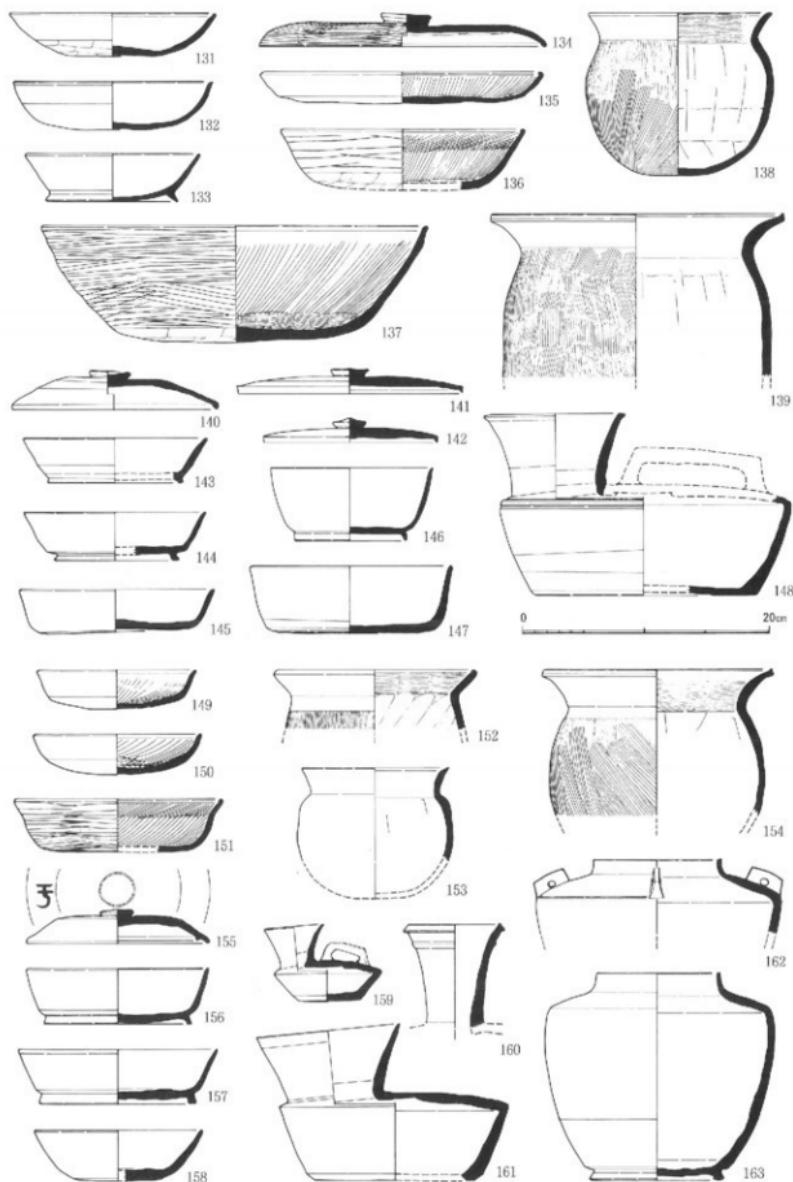


fig.12 SE 7243 • 7237出土土器

(144) が一般的であるが、底部の周縁に低い高台を付けたもの (143) が少量ある。椀B (146) は直立気味の口縁部で、高台は断面三角形を呈する。胎土からも東海地方の製品。蓋には笠形 (140) と扁平 (141・142) の二者があるが、かえりをもつものはほとんどない。平瓶 (148) は体部径23.6cmの大型で肩部に二条の沈線が巡る。扁平な頂部に上側面をヘラ削りで調整した提案がつく。平城宮II期に属すであろう。

15) 井戸 SE7237出土土器 (fig.12-149~163) 整理箱7箱。大半は飛鳥IV~V期に属すが一部 (159・162等) は奈良時代初めに降る可能性がある。器種には土師器杯A・B・C・D・G・H、蓋、皿A、鉢A、小壺B、甕A・B・C、鍋、瓶、甕、須恵器杯A・B・G、蓋、椀A、鉢A、皿A・B、大皿、台付壺、平瓶、長頸壺、短頸壺、擂り鉢、甕がある。他に墨書き土器、転用硯、漆皿、製塙土器が少量含まれる。杯C (149・150) は口径13.7~12.7cm、器高3.1~3.3cm。杯A II (151) はb、手法で口径16.7cm、器高4.4cm。甕Aには内面を削る152とヘラで撫でた153・154などがある。甕Bは扁平な把手を貼り付け、体部内面に当て具痕がある。須恵器杯Aは丸みのある分厚い底部 (158) と平底薄手などがある。杯B (156・157) はいずれも底部ヘラ切り調整。蓋 (155) は笠形をなし口縁部に身受けの小さな返りがつく。外径14.8cm。「于」の墨書きがある。平瓶 (159) は体部径8.8cmで提案がつく。平瓶 (161) は直径18.7cmで角張った肩の体部に広口の口縁部がつく。160は口縁端部下に凸帶状の段をもつ。東海地方の平瓶の口縁部と思われる。短頸壺には角張った肩に沈線を巡らせ四耳をもつ162と、やや張りのある体部で高台をもつ163などがある。

16) 土製品など 砥・土馬のほか、墨書き土器、製塙土器、漆付着土器がある。

砥には一条条間路南側溝 SD6801の蹄脚砥脚部1片、同溝上の包含層などの円面砥3点のほか、須恵器杯B蓋の内面を使用した転用砥6点がある。円面砥 (fig.13) は砥面部径15.3cm、長方形透窓は19個に復元できる。包含層出土ではあるが、本来は南側溝に含まれていたのである。ほかには同大で透窓が22個に復元される破片がある。

土馬はSE7243・7244などから体部4点、脚部4点、尾部1点が出土した (PL.11)。調整と胎土から7個体以上。いずれも長胴短脚で鞍を突帯で表現する形式で、尻繋を竹管文列で表現するものとしないもの、手綱を沈線で描いたものなどがある。平城京の奈良時代前半の溝 SD485出土例等に比べて、胸部の反りがない点で藤原宮跡の土馬の特徴をもつ。

製塙土器は図示したSE8690例 (8) のほかSE8685・SE8664・SE7237など奈良時代前半まで存続した井戸から少量出土している。いずれも外面に手掌文が残り、内面はナデ調整。

漆付着土器には土師器杯A・杯C・杯G、須恵器杯Bなどを利用した漆バレットと須恵器壺・平瓶を利用した漆壺がある。いずれも少量づつではあるが、SE8690・7244・7237など銅ス

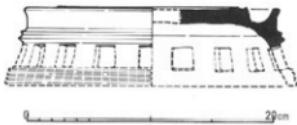


fig.13 円面硯

ラグ・フィゴ羽口と重複した出土分布を示す。

墨書き器は、図示したもののはかにSK7236の須恵器杯Aがあるが、判読できない。

17) 右京一条一坊出土土器の特徴

①上師器杯A Iを例にとれば、西北坪の土坑・井戸出土土器は径高指数29~26で2段放射暗文の飛鳥IV~V期の上器が主体を占める。そのうちSE8689には抜取穴埋上層に、SE8685には抜取穴底近くに口徑20cm程度、径高指数18~19、1段放射暗文+連弧暗文の平城宮II期や径高指数17前後で1段放射暗文だけの同III期の上器が少量含まれている。西南坪の井戸、土坑の場合も同様で、SE7244に同様の時期の上器が含まれるが、内面の暗文がなくなった奈良時代後半以後の上器は認められない。両坪は飛鳥IV期に造営され、飛鳥Vの時期に改作を受けた後、平城宮II・III期に完全に廃絶する。

奈良時代の土器はこれまでに、京城では本坊に隣接する右京一条二坊や左京一条二坊、宮城東の左京六条三坊などで確認されているが、宮城では西外濠、東方官衙地区の一部などその出土は限定的である。宮・京城の大部分は遷都後程なく廃絶したと考えられるが、一部は左京六条二坊のように、役所（香山正倉）として利用されたり、本坊を含む北辺街Xの一部のように、大きく性格を変えることなく、暫く存続したと思われる。

これに対して、一条条間路側溝には明確な奈良時代の土器はみられない。この点は他の条坊関連遺構の場合と同様であり、条坊側溝は藤原宮の廃絶後程なく埋め立てられたのであろう。

②土坑・井戸出土土器の器種構成では鍋・甕・竈・瓶など煮炊具が目立つ。比較的出土量の多い井戸SE8690・7237・7243で算出した器種構成比は、杯皿等の供膳具：壺鍋等の煮炊具：壺等の貯蔵具が6~7:3:1となる。藤原宮東大溝SD105など宮城内中枢部では10:1:1の比率にあって供膳具が圧倒的である。煮炊具が供膳具の半分程度存在する構成が、小規模な建物で構成される宮城北辺の街Xでの器種構成上の特徴とみることができる。そこでは、瓶・竈の破片も少量ずつ出土しており、比較的小規模な単位で煮炊きが行なわれたであろう。

③十師器杯類の内容では木葉痕を残すa手法の杯・皿類（102・104・135など）が多いことと暗文をもつ杯A・Cを模倣した杯（131・132など）の存在が注目される。前者は底部のヘラ削りを省略したもので、後者は法量は規格に合っているものの、暗文・ミガキを施さない。ともに粗雑な作りの土器である。後者は藤原宮東面北門周辺の内濠SD2300等にもみられ、必ずしも京城に限定されるわけではない。むしろ東面北門周辺は官奴司の木簡が出土するなど、現業部門をかかえた官衙の存在が想定される地域であり、本調査区周辺が銅スラグ、フィゴ羽口、漆皿など工房関連遺物の出土する地域である点で共通する性格にあると考えられる。すなわち、これら粗雑な作りの土器は都城遺跡内でも現業階層によって使われた供膳具あるいは道具と考えられ、その山上は単に京城と宮城との違いではなく、そこで行なわれた活動の内容（遺跡の性格）の違いを反映しているとみられる。

2 瓦

瓦は少量であり、井戸・土坑などから散発的に出土した。内訳は軒丸瓦1点、軒平瓦2点、熨斗瓦3点、丸瓦約12kg（約80片）、平瓦約23kg（約150片）である。

- 1) 軒丸瓦 6273型式B種1点（fig.14-1）が井戸SE8689の井戸枠内から出土した。6273型式は内区に複弁八弁連草文を配し、外区内縁に珠文、外縁に凸鋸歯文をめぐらす。A～D種があり、全て藤原宮所用である。B種は弁の盛り上がりが弱いが、弁端で強く反るのが特徴である。C種と酷似するが、中房がより高く、凸鋸歯文の数も64と1個少ない。外区外縁に範傷が1箇所あり、瓦当側面に範端痕が残る。瓦当裏面や丸瓦部凸面はナデ調査。瓦当裏面の一部に押付した布目痕が残る。表面は黒く燻し焼風である。胎土に黒色粒を多く含む。高取町と御所市の高台・峰寺瓦窯産である。藤原宮では、大極殿・朝堂院地区で、6273型式B種は軒平瓦6641型式E種と組み合わせて使用されたことが判明している。ともに粘土紐桶巻き作りである。
- 2) 軒平瓦 6641型式F種1点（fig.14-2）が井戸SE8664の掘方から、6643型式D種1点（fig.14-3）が井戸SE8685の井戸枠抜き取り穴から出土した。6641型式は内区に左から右に流れる偏行唐草文を配し、上外区に珠文、下外区と脇区に線鋸歯文をめぐらす。A・C・E～Pの14種があり、A・C・E・F・N種が藤原宮所用である。F種はA種と似るが、支葉の巻きが強いのが特徴である。瓦当面に糸切り痕がある。頭は貼り付け削り出し段頭である。平瓦部の凸面は頭近くまでを縱方向にヘラケズリした後、横方向にナデ調整を加える。凹面は瓦当寄りを横方向にヘラケズリするが、以下に布目が残る。大和郡山市の西田中・内山瓦窯産であり、軒丸瓦6281型式B a種との組み合わせが判明している。6641型式F種は粘土板桶巻き作りである。藤原宮では、西方官衙地区で、6641型式F種がやまとまって出土している。
- 6643型式は内区に右から左に流れる偏行唐草文を配し、上・下外区と脇区に珠文をめぐらす。A～E種があり、全て藤原宮所用である。B～E種は文様が酷似するが、外区の珠文数や唐草文との位置が異なる。D種は左端に範割れ痕があり、文様がずれている。粘土紐桶巻き作りで、頭は貼り付け削りだし段頭である。平瓦部の凹面は瓦当寄りを縦・斜方向にヘラケズリするが、以下は桶の模骨痕（幅約2.5cm）、布とその継じ合わせ痕、粘土紐痕が残る。凸面は頭近くを縦方向にヘラケズリするが、以下は縦位の縄叩き目が残る。胎土に黒色粒を多く含む。高台・峰寺瓦窯産である。6643型式D種は藤原宮ではそれほど多く出土していない。
- 3) 熨斗瓦 3点とも切熨斗瓦（fig.14-4～6）で、粘土紐桶巻き作りである。凸面は縦位の縄叩きのち丁寧にナデ調整するが、凹面は不調整。幅は11～12cmが2点、17cm前後が1点。前二者には側縁を面取りするもの（4）と、しないもの（5）とがある。それぞれSE8650とSE8690から出土。後一者は両側縁を丁寧に面取りする（6）。SE8689出土。他に割熨斗瓦と思われる瓦が3点ある。

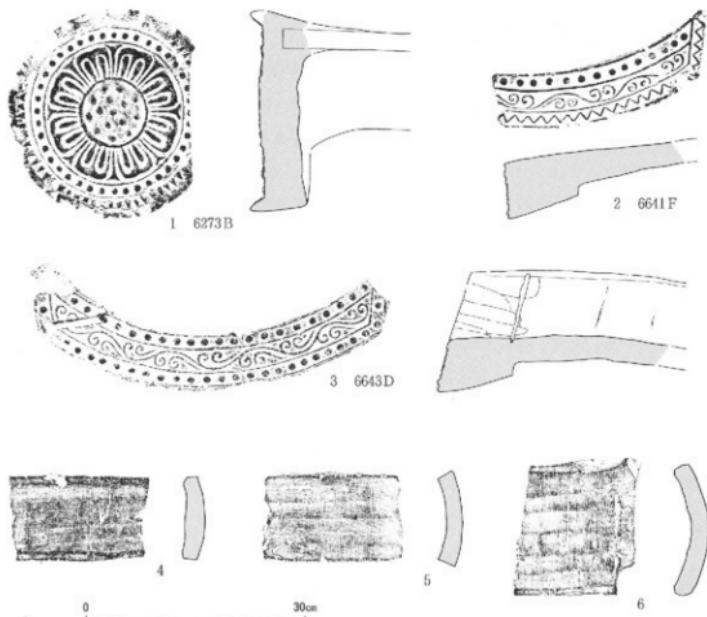


fig.14 軒瓦・熨斗瓦

4) 丸・平瓦 ほとんどが小片である。丸瓦で判明するものは全て玉縁丸瓦である。凸面に繩叩き目が残るもの、凸面に回転によるハケメ調整を施すものなどがある。後者は側面をヘラケズリし、凹面の側・端縁を面取り。胎土に黒色粒を多く含む。高台・峰寺瓦窯産であろう。

平瓦は凸面に繩叩き目の残るものが多く、粘土組桶巻き作りとわかる例もある。他に格子叩き目平瓦が1点、凹凸面とも丁寧に横方向のナデ調整を施すものが1点ある。後者は完形品である。長さ44.9cm、広端幅32.1cm、狭端幅30.0cm、厚さ約2.3cm。側面はヘラケズリし、凹面の両側縁と広端縁に面取りを施す。比較的硬質で灰褐色を呈し、胎土に長石粒をやや多く含む。

5) 小結 今回の調査で出土した瓦は、ほとんどが藤原宮所用瓦と同じ製品であるが、量は少なく、本瓦葺き建物に用いられたとは考えられない。藤原京内では、これまでの調査において、寺院を除いて瓦がまとまって出土した例はなく、1坪占地の大規模な邸宅、たとえば右京七条一坊西南坪では、正殿や脇殿が棟だけ瓦を用いた甍棟であった可能性を考えている(『藤原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告』1987)。今回の調査地で出土した瓦の場合、熨斗瓦の数がやや目立つので、近くに甍棟の建物があったと考えることもできよう。

3 錢貨、金属製品、木製品、その他

1) 錢貨 (PL.13) 井戸 SE8664・8665上層から和同開珎の断片が出土したため、埋土を水洗して同一破片を回収した。伴出土器などから藤原宮期の和同錢である可能性が高いが、3片に割れるなど遺存状態が悪く、銭文など細部の特徴も明確でない。外縁の幅が広い「潤縁」で、背面の方形郭が大きい「背広郭」に属する。「和」「開」「珍」の3字を確認でき、「降和」「小珍」の可能性があるが判然としない。また「開」字の門構え上部が隸書風に開く「隸開」か否かも不明。外径2.45cm。藤原宮期の和同錢としては、藤原宮第75-15次調査出土錢を確定な資料としてあげることができる。この銭は隸開、潤縁、背広郭という特徴があり、字体は小振りで和同銀錢に類似する。また蛍光X線分析の結果、成分中にアンチモンを数%含むことが明らかになっている。近年、藤原宮期前後の銅製品の特徴として、アンチモンを顕著に含有する傾向のあることが判明しており(『奈良国立文化財研究所年報1996』)、本銭も以下に報告するように、アンチモンの含有量が高い。この事実は、第75-15次調査出土銭に共通する銭形の特徴、伴出土器の年代とも矛盾せず、本銭を藤原宮期の和同錢とする有力な傍証となろう。

銅錢の成分分析結果 蛍光X線分析の非破壊的手法によって本銭の成分分析を行なった。結果は次表にみるように、銅を主成分に、錫、鉛、アンチモン、ヒ素、銀、鉄、ビスマスを副次的に含有するが、注目すべきことにアンチモンの含有量が錫を上回る。アンチモンを顕著に含む銅錢としては、藤原宮第75-15次調査出土和同錢と富本錢をあげることができ、富本錢はこれまでに出土した4例のすべてに数%のアンチモンを含むことが判明している。また藤原宮80次調査出土の海獸葡萄鏡も同様であり、今後、古代金属を考える上で見落とすことができない元素の一つとしてアンチモンに着目する必要があるだろう。

銅 88.4	錫 1.5	鉛 0.2	アンチモン 3.8	ヒ素 1.3	銀 0.4	鉄 3.6	ビスマス 0.9 (%)
--------	-------	-------	-----------	--------	-------	-------	--------------

2) 金属製品 (fig.15・16、PL.13) 鉄製品が5点出土したが原形を知りうるものは1点にすぎない。1は全長7.6cm、身幅0.5cm、厚さ0.25cmの鏡。全体に華奢なつくりで、断面長方形の両平面に鏡目が刻まれている。鏡を境に「く」の字状に屈曲するが、本来の形状であるかは不明。身は両端部でやや幅を広げ、先端は厚さを減じて尖りぎみに終わる。屈曲側の面に右下がりの斜線を重ねた単目の鏡目が、外面の一部に斜格子の複目が認められる。古代の鏡の出土例は皆無に近く、唯一、宮城県東山遺跡に出土例があるが、全長17cmを超える大型品である。本例は正倉院に伝存する小型の鏡(南倉88鏡第1号)に近く、彫金などの細工用の鏡とみられる。井戸 SE8689出土。南西坪の65次調査区では、井戸 SE7237から鐵鎌と刀子が出土している。鐵鎌2は笠被と茎の界に棘状突起をもつ棘笠被の鎌。左右均整に小さく刃をつけた鎌矢鎌で、実戦用の中心となる形式の鎌である。鏡上部に黒漆が付着し、その下に糸巻きの痕跡が

残る。全長10.4cm、茎長3.1cm。刀子3は茎を折損するが、刃部はほぼ完存。平造り角棟の最も一般的な刀子で、棟関から切先に向かって棟厚を減じる。よく使い込まれており、研ぎによって大きく身が細る。刃関は不明瞭。現長9.2cm、身長5.6cm。棟厚0.35cm。

12は65次調査区の井戸SE7237から出土した黒漆塗木柄付刀子。完形に近い刀身が本柄に装着された状態で遺存する。現状で木柄の柄元から中程で折損し、刀身と木柄が分離するが、全体の残りは極めて良い。現存長23.4cm。刀身は平造り角棟の一般的な刀子で、切先をわずかに欠失するものの鋭利な刃部が残り、刃関と棟関の造り出しも明瞭。棟は身中程から切先に向かってわずかに内湾する。身現長8.3cm、刃元の身幅0.83cm、棟厚0.38cm。茎は途中で折損し茎端を柄中に残す。X線写真による復原茎長7.2cm。

木柄は全長15.0cmで、背方向に緩やかに湾曲する。断面は背に丸みをもたせ、腹側を尖らせた卵形を呈する。柄元の断面長径1.8cm、短径1.42cm。柄元から深さ7.6cmの茎孔が割り抜かれしており、柄元木口には鉄刀身を固定した幅0.5cm、厚0.1cm弱の鍔^{ナハ}が埋め込まれた状態で遺存する。全面に黒漆が塗布されているため木取りや細部の加工は不明であるが、X線写真撮影の結果、柄頭3cmほどが別材であることが判明。その材質や接合方法は判然としないが、兜金形をした柄頭材を接着剤で継いだようである（fig.16 X線写真参照）。柄長4寸で計画した木柄を製作途上で5寸に変更したものか。刀子は木工具のみならず万能の切削具として多用されたため、出土例の多い鉄製品である。しかしながら木柄に装着された状態での出土例は少なく、出土木柄も白木のものがほとんどである。黒漆塗り木柄をもつ本品は、工具とみるよりは官人が携帯した書刀とみるべきであろう。藤原宮期の刀子を知るうえで一級の資料である。

3) 木製品 (fig.15, PL.12) 井戸を中心で祭祀具や工具柄などが出土した。5から9は斎串。5は細長い薄板の両端を主頭状につくったもので、上端の斜辺の左右から割裂くように切込みが入る。長12.9cm、幅2.1cm、厚0.3cm、SE8665出土。6と7は上端を主頭状に、下端を剣先状につくる。切込みは7が斜辺に、6が斜辺直下に入る。7は全体に腐食が進み残りは悪い。現存長20.4cm、厚0.4cm、井戸 SE8689出土。6は現存長14.5cm、幅1.5cm、厚0.25cm、井戸 SE8650出土。8も井戸 SE8689出土品で、切込みは側辺に入る。現存長8.2cm、幅1.2cm、厚0.4cm。9は剣先状に尖った斎串の下端部である。SE8664出土。これらの斎串は、いずれも井戸の埋土中から他の祭祀具を伴わずに出土しており、井戸の祭祀に用いられたものと推測される。4は中空の茎の外面を縦方向に削り、外径1.2cm、長10cmの棒状品に仕上げた木柄。小口から節にかけて径0.8cm、深さ9.7cmの孔があく。井戸 SE8690出土。10は井戸 SE8685から出土した部材。折損のため全形は不明であるが、一本を削りだして上端に丸棒状の握り部をつくり、その直下を三角形に大きく削り抜く。欠損部を左右対称に復原すると、スコップの柄に似た把手状木製品となる。以上に他に、上坑 SK8667から桶の側板、井戸 SE8689から先端を尖らせた杭がまとまって出土。また SE8650・8665・8685・8690から桃の種子が出土している。

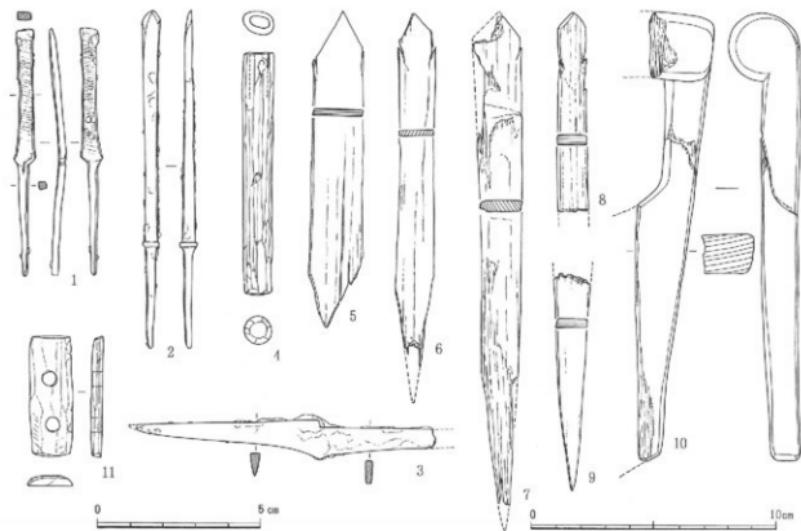


fig.15 金属製品・木製品・鹿角製品 (1~3・11: 2/3、木製品1/2)

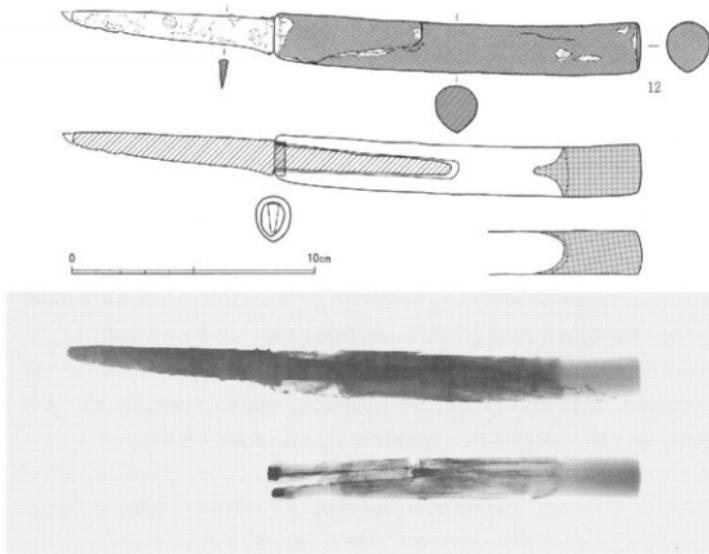


fig.16 黒漆塗木柄付刀子実測図・X線写真 (1/2)

4) 鹿角製品 (fig.15、PL.13) 11は縦3.75cm、幅1.35cmの平面矩形の鹿角製品。中軸上に径4mmの円孔が2孔あく。上面は角を落として甲盛りに、下面を平坦につくる。上面に整形時の縦方向の削り痕が残るが、研磨されて光沢をもつ。側面形は、中央部から両端に向かって厚さを減じ、小口は傾斜をつけて截られる (中央部最大厚0.4cm)。用途については詳らかではないが、正倉院に伝存する葛製胡緒の緒の留具に類似する。胡緒を身体に装着するための緒や、矢束ねの緒を背板に固定する座金状の部品で、対になる円孔に緒を通して背板に固定したり、緒締としている。本品の用途を推測する上で参考になろう。井戸 SE8664の枠内最下層から出土。

5) 石製品 (fig.17、PL.13) 今回の調査区に外部から意図的に搬入された石材を62点抽出できた。内45点が流理構造が顕著な耳成山産の斜長流紋岩で、表面は風化のために灰黄白色を呈し、板状節理が発達。その内の21点に、小口面を中心とした使用痕跡が認められる。この他に定形的な流紋岩系砥石や弥生時代のサヌカイト製石器などが出土している。

1は流紋岩質溶結凝灰岩（俗称棟原石）製の低石。厚さ6cm前後の板状節理の表裏面と1側面を使用。研磨面は自然の凹凸が磨滅して平滑となり、複数方向の刃痕が認められる。井戸 SE8689出土。3は表面に1~2mm大の長石風化による空隙をもつ流紋岩系の砥石。長さ7.0cm、幅6.4cmの平面五角形をした小型の砥石で、小口を含み全面が研ぎ減る。上面は3方向に研ぎの方向を変えて使用。土坑 SK8686出土。2・4~6は井戸 SE8690から出土。2は砂岩製の不整形砥石。折損著しく本米の形状は不明。2面が大きく凹レンズ状に研ぎ減る。4は厚さ1.3cmの斜長流紋岩製の砥石。板状節理面の1面を使用する。研磨面に筋状の擦痕が顕著に残る。5と6は擦石に近く、板状節理面の片面を使用し、大きくすり減って角が磨滅する。

7~9は、弥生時代の石器。9は剥片刃器で土坑 SK8686から出土した。不定形剥片の1辺にJ字型の両面剥離で刃をつくり出す。刃部の対辺となる背部には自然面が残る。8は平面台形の小型の刃器。刃部は下辺と両側辺に作られ、いずれも使用による磨滅が顕著。井戸 SE8665出土。60次調査では、一条条間路南側溝 SD6801から完形に近い木葉形の石槍7が出土。現長9.3cm、重量39.3gで、先端をわずかに欠損。両面から細かな二次調整を加えて鋭利な刃をつくり出す。

以上その他に井戸 SE8689から鋳型片が出土した。小片のため製作された器物は不明であるが、細密な文様の一部が残存する (PL.13参照)。鋳型片は過去の調査で、西北坪の井戸 SE8610から1点、一条条間路の北側溝から4点、南側溝から1点、南西坪のSK7240から1点出土している。これに関連する鋳造関係遺物は、60・65次調査区から鞠羽口片が19点、坩堝片が38点出土しており、付近に鋳銅関係の工房が存在したことを示唆する。これらの分布は、南西坪の全域に分布するものの、特に60次調査区の西部に集中する傾向があり、付近に工房の存在が推測される。こうした鋳造関係遺物の出土と宅地内の小規模建物のあり方は、平城京の八条、九条付近の様相と類似し、藤原京の土地利用と金属生産工房のあり方を考える上で興味深い。

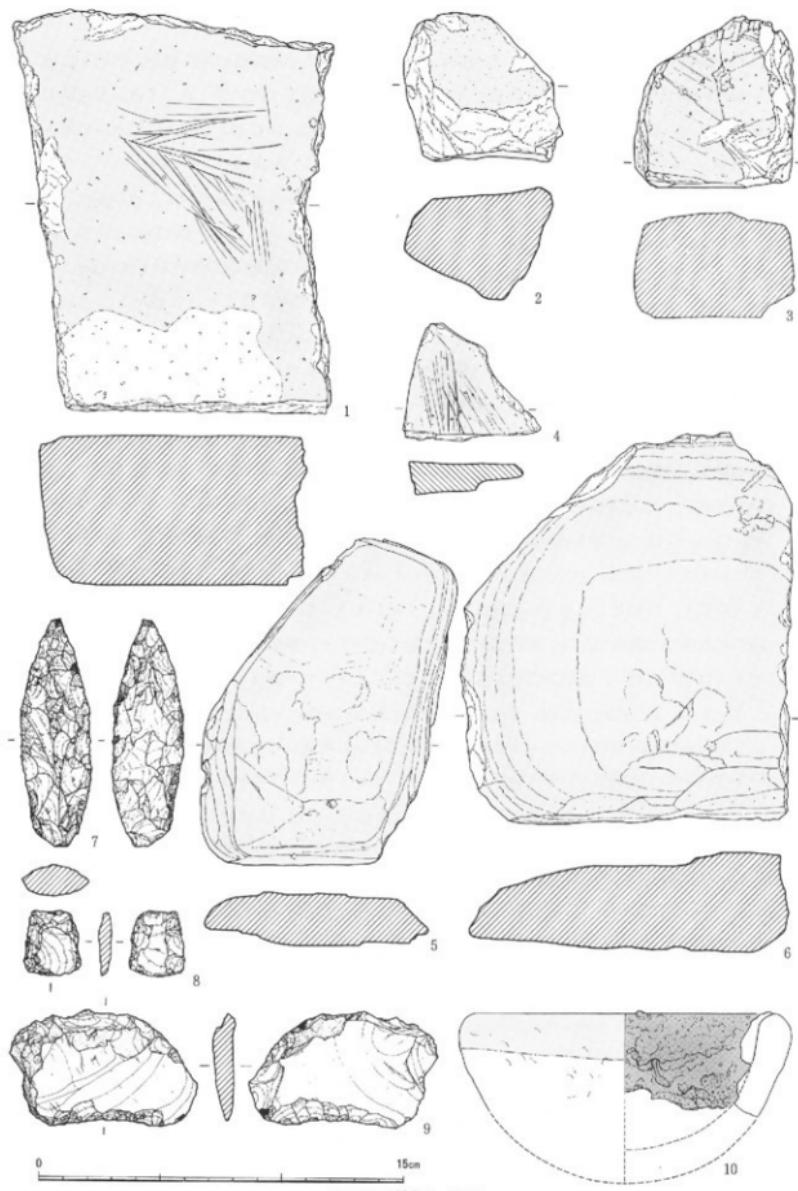


fig.17 石製品・堀堀

付 寄生虫卵分析・花粉分析

株式会社 古環境研究所

1 試料について

西区で検出した井戸 SE8685と大土坑 SK8667の堆積物について、寄生虫卵分析および花粉分析を行ない、遺構の性格と植生の復元を試みた。試料は SE8685 の 1・2 (上層・下層)、SK8667 の 3 点である。

2 寄生虫卵分析

1) 方法 微化石分析法を基本に以下のように行なった。

- (1) サンプルを採量する。
- (2) 脱イオン水を加え攪拌する。
- (3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。
- (4) 25% フッ化水素酸を加え30分静置。(2・3度混和)
- (5) 水洗後サンプルを2分する。
- (6) 片方にアセトトリシス処理を施す。
- (7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。
- (8) 検鏡・計数を行なう。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行なった後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行なった。

2) 結果 SE8685の2より少量の回虫卵と鞭虫卵が検出されたが、他からは検出されなかつた (tab. 3)。

3) 小結 分析の結果、寄生虫卵は少量の検出があるは検出されなかつた。後述する花粉分析では花粉粒が良好に検出されていることから、寄生虫卵が分解されるような堆積保存環境でなかつたと考えられる。これらのことからみて、SE8685とSK8667は糞便に強く汚染される堆積環境ではなかつたと推定される。よって、便所遺構である蓋然性はないとみなされる。

3 花粉分析

1) 方法 花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行なった。

- (1) 5% 水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

tab. 4 花粉分析結果

学名	分類群	和名	井戸 SE 8685		土 砂
			1	2	
ArboREAL pollen	樹木花粉				
<i>Podocarpus</i>	マキ属		1		
<i>Abies</i>	モミ属		8	4	
<i>Tsuga</i>	ツガ属		4	2	1
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複管束葉属		13	12	29
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ		26	23	5
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ		2		
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イネ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		33	36	3
<i>Juglans</i>	クルミ属				1
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ		1		1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属				121
<i>Betula</i>	カバノキ属		1		3
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ			1	1
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリ-シイ属		11	12	10
<i>Fagus</i>	ブナ属		1	4	1
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属		4	5	12
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属		10	32	11
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ			2	6
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ		2	1	4
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ				1
<i>Vitis</i>	ブドウ属				2
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属				1
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属				61
ArboREAL · NonarboREAL pollen	樹木・草本花粉				
<i>Portulaca oleracea</i>	スペリヒユ属			1	
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科		13		3
Rosaceae	バラ科				5
Leguminosae	マメ科				2
NonarboREAL pollen	基本花粉				
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属				1
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属				
Gramineae	イネ科		217	117	31
<i>Oxys type</i>	イネ属		85	6	6
Cyperaceae	カヤツリグサ科		81	83	5
<i>Anelasma keisak</i>	イボクサ				1
Monochoria	ミズアオイ属			1	
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節				2
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科		46	60	
Caryophyllaceae	ナデシコ科		2	5	2
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属		3	1	
Cruciferae	アブラナ科		10	8	
Umbelliferae	セリ科		4	6	
<i>Plantago</i>	オオバコ属		2		
Lactucae	タンボボ革科		10	5	3
Asteroidae	キク亜科		12	5	3
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属		23	16	2
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolete type spore	單条構胞子		13	4	3
Celatopteris	ミズフライ		1		
Trilete type spore	三條構胞子		8	9	2
ArboREAL pollen	樹木花粉		116	135	274
ArboREAL · NonarboREAL pollen	樹木・草本花粉		13	1	10
NonarboREAL pollen	草本花粉		497	315	53
Total pollen	花粉總數		626	451	337
(試料1cc中に算定)			18780	9922	17524
Unknown pollen	未同定花粉		3	4	4
Fern spore	シダ植物胞子		22	13	5

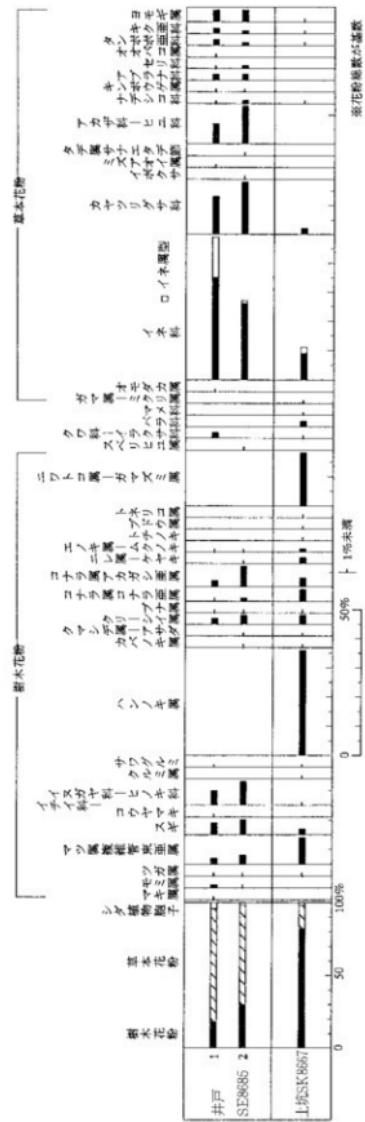


fig.18 花粉組成圖

- (2) 水洗の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行なう。
- (3) 25% フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- (4) 水洗した後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- (5) 再び水酢酸を加えた後、水洗を行なう。
- (6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行ない、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行なった後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行なった。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行なった。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行なった。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（—）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類し、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

2) 結果

(1) 分類群 出現した分類群は、樹木花粉22、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉17、シダ植物胞子3形態の計46である。これらの学名と和名および粒数を tab. 4 に示す。以下に出現した分類群を示す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亞属、スギ、コウヤマキ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属—アサダ、クリーシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亞属、コナラ属アカガシ亞属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属—ムクノキ、トチノキ、ブドウ属、トネリコ属、ニワトコ属—ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕 スベリヒュ属、クワ科—イラクサ科、バラ科、マメ科
〔草本花粉〕 ガマ属—ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、アカザ科—ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、セリ科、オオバコ属、タンボボ亞科、キク亞科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕 単条溝胞子、ミズワラビ、三条溝胞子

(2) SE8685 樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。樹木花粉ではイチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、スギ、マツ属複雑管束亞属、コナラ属アカガシ亞属、クリーシイ属が主に出現

する。草本花粉では栽培植物や人里植物を多く含むイネ属型を含むイネ科が優占し、カヤツリグサ科、アカザ科—ヒユ科がやや高率で、ヨモギ属、アブラナ科などが出現する。なお、試料1では特にイネ属型を含むイネ科が優占する。

(3) SK8667 樹木花粉の占める割合が草本花粉より極めて高い。樹木花粉ではハンノキ属、ニワトコ属—ガマズミ属が優占し、マツ属複維管束亞属もやや高率である。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科が主に出現する。

3) 花粉分析から推定される植生と環境 SE8685とSK8667から得られた花粉群集は著しく特徴が異なる。示唆される植生はまったく異なり、同発掘区内であるので時期が隔たると推定される。以下、十坑ごとに植生と環境の復元を行なう。

(1) SE8685 周囲はイネ科を中心に、カヤツリグサ科、アカザ科—ヒユ科、ヨモギ属、アブラナ科など繁茂していたと推定される。これらはいずれも集落域や農耕地に生育する人里植物ないし農耕雑草の性格をもつものであり、周囲は集落や農耕地の広がる人為的な環境であったと推定される。上位（試料1）ではイネ属型の出現率が高く、水田も分布していたと推定される。樹木はイチイ科—イヌガヤ科・ヒノキ科、スギ、マツ属複維管束亞属、コナラ属アカガシ亞属、クリーシイ属などが周囲で孤立木の状態かやや遠方で森林を形成していたと考えられる。照葉樹が優占しないため、人為性の高い森林が推定される。

(2) SK8667 周囲にはハンノキ属、ニワトコ属—ガマズミ属、ニヨウマツ類（マツ属複維管束亞属）の二次林性の樹木が繁茂していた。放棄地が多く途中柵の樹木が多く生育していたと考えられる。

参考文献

- Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard (1992) Methods for Extracting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Journal of Archaeological Science, 19, p.231—245.
- 金原正明・金原正子（1992）「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構—藤原京7条1坊』奈良国立文化財研究所 p. 14—15
- 金子清俊・谷口博一（1987）「線形動物・扁形動物・医動物学」『新版臨床検査講座』8 医歯薬出版 p. 9—55
- 中村 純（1973）『花粉分析』古今書院 p.82—110
- 金原正明（1993）「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第10巻』角川書店 p. 248—262
- 島倉巳三郎（1973）『日本植物の花粉形態』『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集 p. 60
- 中村 純（1980）『日本産花粉の標識』『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集 p. 91
- 中村 純（1974）「イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として」『第四紀研究』13 p. 187—193.
- 中村 純（1977）「稻作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号 p. 21—30

IV　まとめ

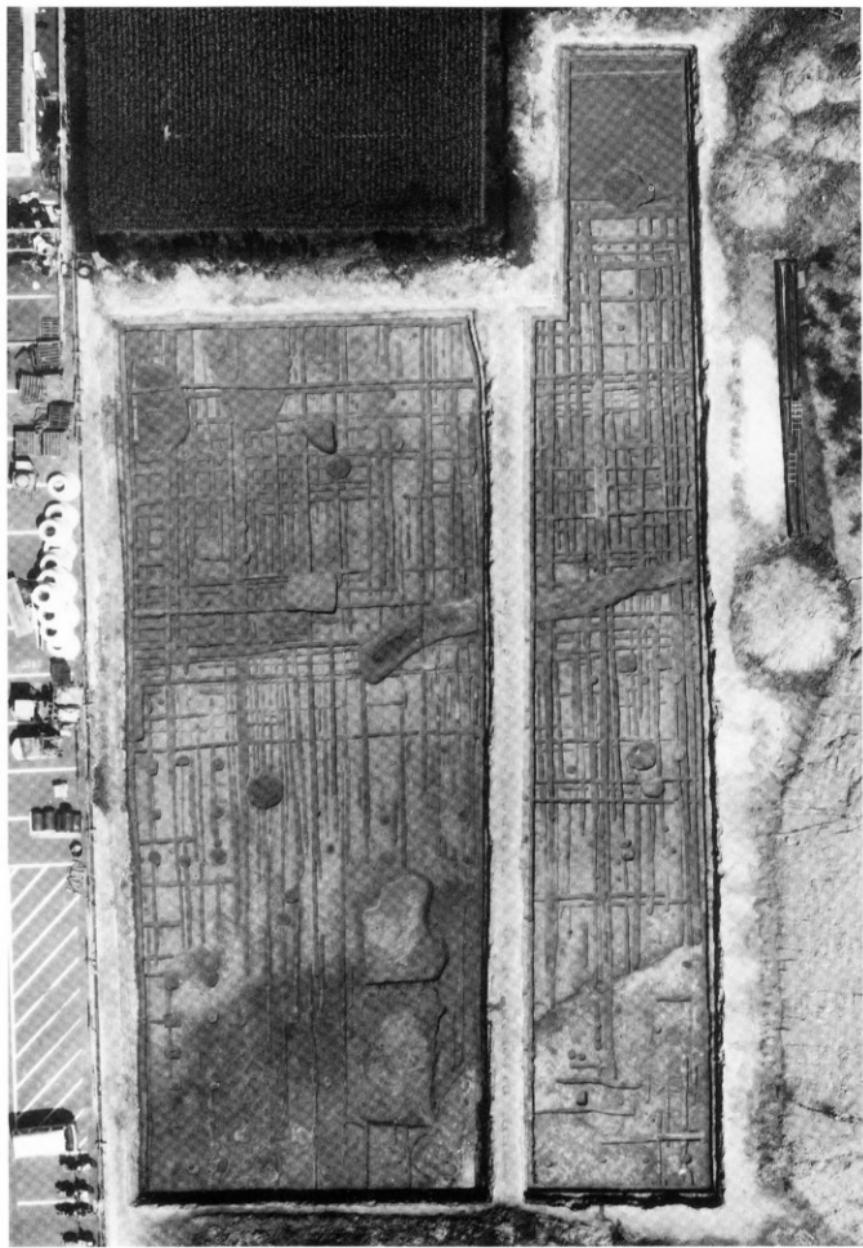
第81次調査の調査成果をまとめると、次のような特徴をあげることができる。

まず第1は、藤原宮期の建物が少なく、また規模も小さい。但し、遺構の重複関係からみて、藤原宮期に少なくとも二時期あることが確認できた。これまでの京内の例では、右京二条一坊東南坪、四条二坊東北・西北坪、七条一坊西南坪、七条二坊西南坪、八条一坊東北坪などにおいて、大規模な建物や、坪をまたぐ壇の存在などが報告され、一方、右京三条一坊東北坪、七条一坊西北坪、七条二坊東南坪では、小規模な建物しか検出されていない。今回の発掘区と周辺部を含めた宮の北方では、桁行5間以上に及ぶような建物は検出されず、柱穴も小さい。したがって、これを一般化すれば、宮から離れた場所では、小規模建物群によって構成される宅地が多いものと予想される。建物の密集度は場所によって違いがあり、右京一条二坊東北坪のように、比較的多くの建物があるところと、右京一条一坊の西北・西南坪のように希薄なところがあることが判明した。当時の藤原京の人口からすると、今回のような建物の希薄な宅地というのが、むしろ一般的なありかただったのではなかろうか。

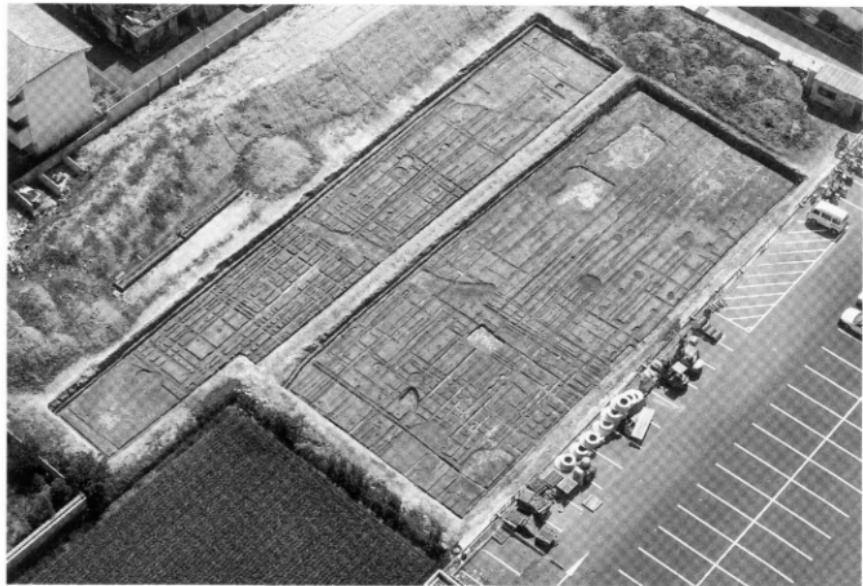
第2に、今回の発掘区およびその周辺では、工房に関わる遺物が目につくことがあげられる。藤原京内における鉄造関係遺物の量としては、西南坪にあたる第60次調査のそれが際だって多く、さらに遺物の拡がりは今回の西北坪にも及んでいる。このことは、宮の北辺にいくつかの工房群があったことを示唆する。建物の少ない割に井戸が多い点は、それと関わるのかとも推定できるが、いまのところ明確な工房の遺構は確認できていない。工房群がこのあたりに集中していたとすると、それが室内工房的なものか官司との関わりがあるのか、あるいは平城京と同様に、製品の供給先としての市が近接していた可能性があるのかどうか、などは今後の大きな課題である。

第3に、和同開珎の出土がある。藤原京より出土する和同銭は、同期のものであることが確認できれば、最古の鑄造に属するものと言えるが、これまで遺構に伴う和同銭の出土はほとんどなく、藤原宮第75-15次調査の1点だけであった。今回の和同銭も藤原宮期のものである可能性が高いと考えるが、その成分分析の成果が大きな意味をもってくるであろう。

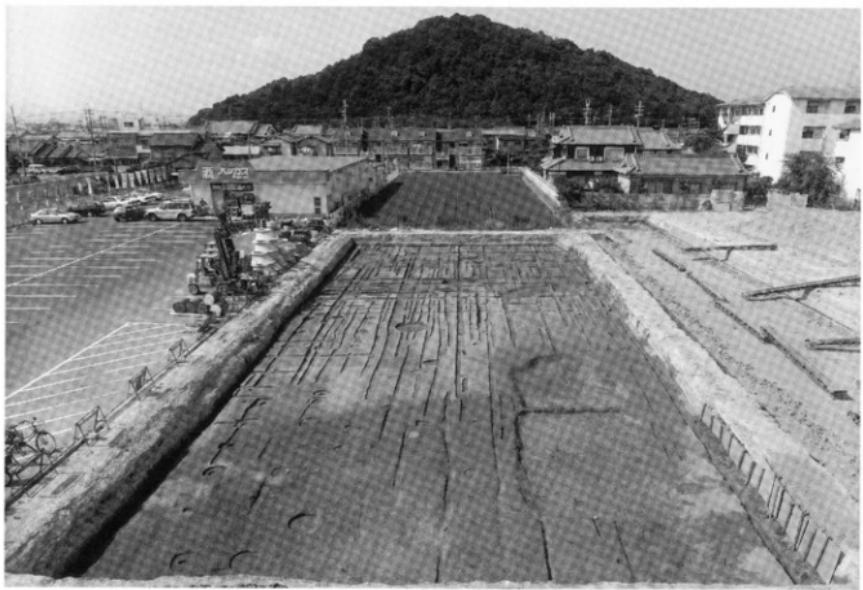
最後に、第65次調査と同様に、遺構の廃絶時期が奈良時代に降る可能性を示した点があげられる。建物の存続時期は明確でないものの、井戸や土坑に若干ながら奈良時代の土器が含まれていることは見逃すことのできない事実である。これは条坊道路が藤原宮の終焉とともに廃絶した点と対照的であり、遷都後もしばらくは宅地ないし、周辺の土地経営との関係で存続したことを見出す。ただし、奈良時代後期の遺物がないことからすると、ほぼそのころには藤原京城は水田と化したのであろう。今後、なお遷都後の京城の状況を検討する必要があろう。



第81次調査区全景



1. 調査区全景（北西上空から）



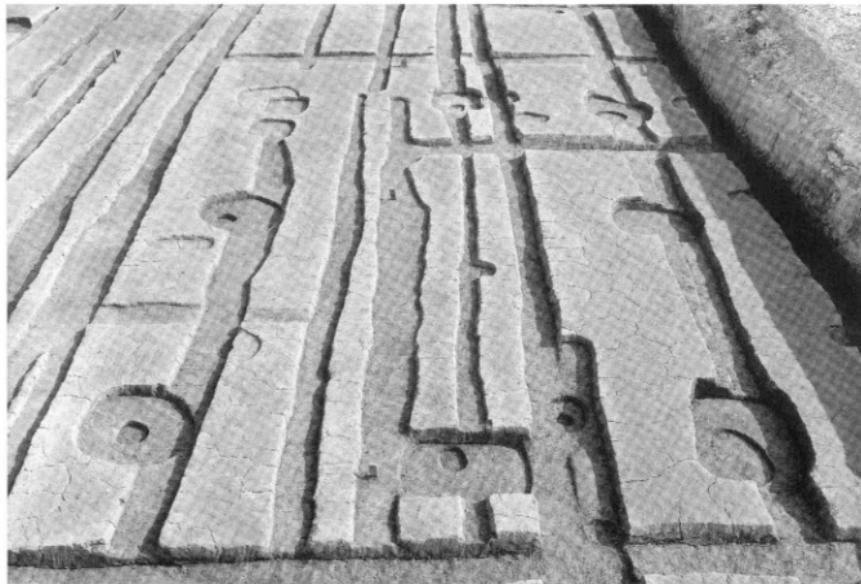
2. 西区全景（南から）



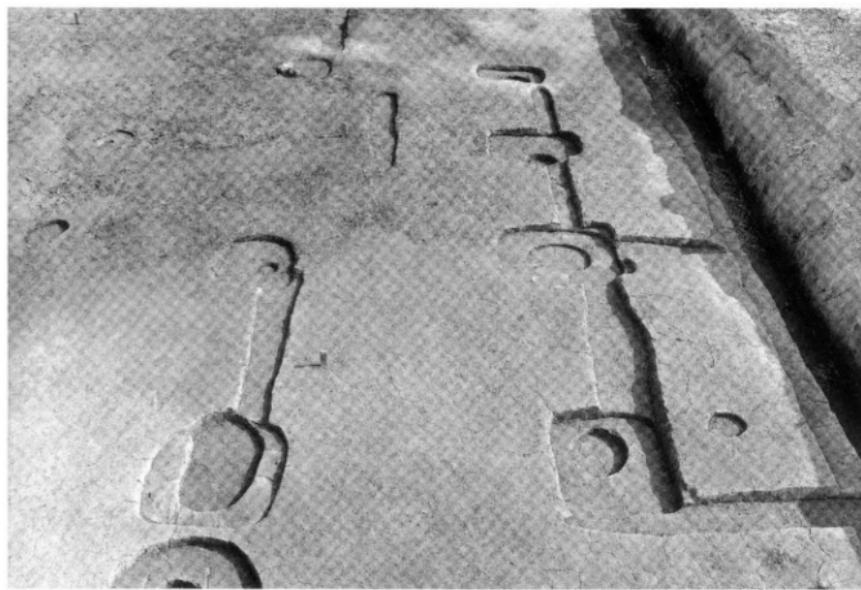
1. 西区南半部（東から）



2. 西区北半部（東から）



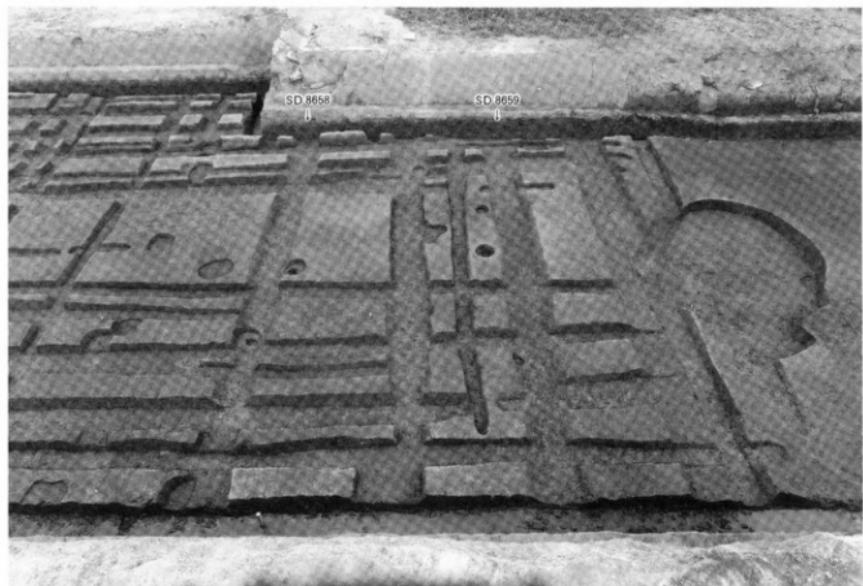
1. 建物 SB 8675 (北から)



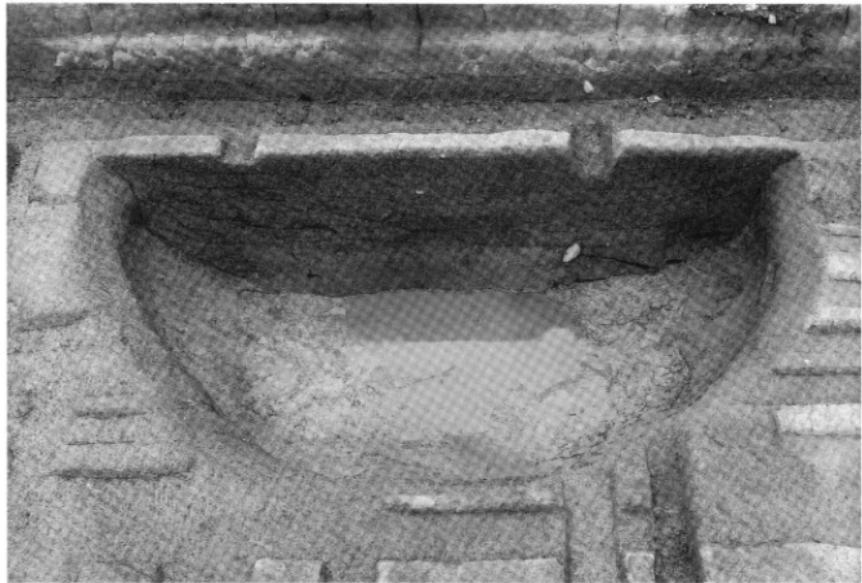
2. 建物 SB 8670 (北から)



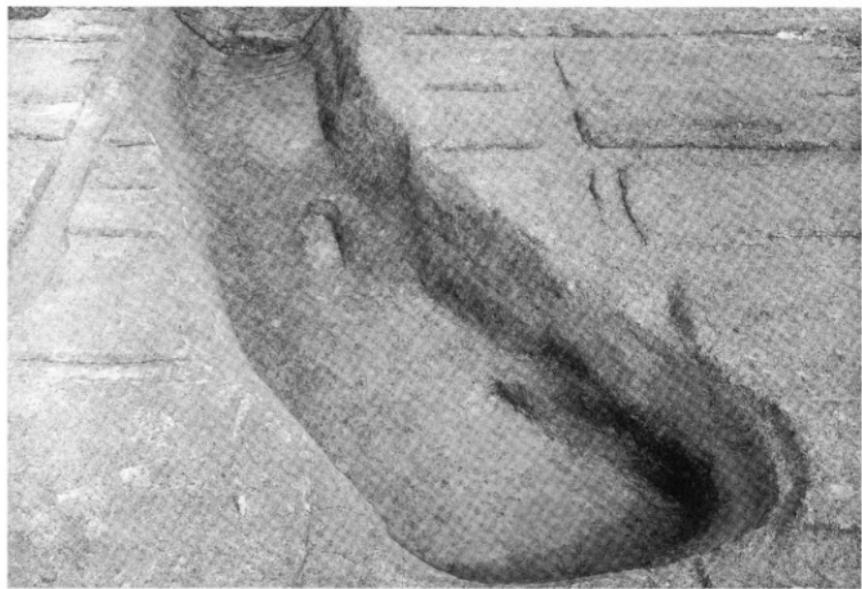
1. 東区全景（南から）



2. 溝 SD 8658・8659（東から）



1. 井戸 SE 8690 (東から)



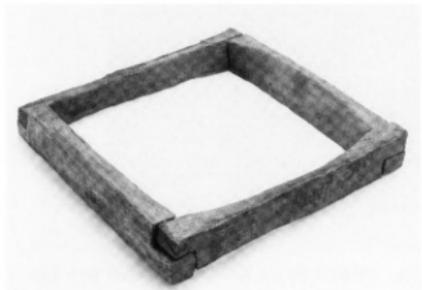
2. 溝 SD 8655 西半部 (西から)



1. 井戸 SE 8664 (南東から)



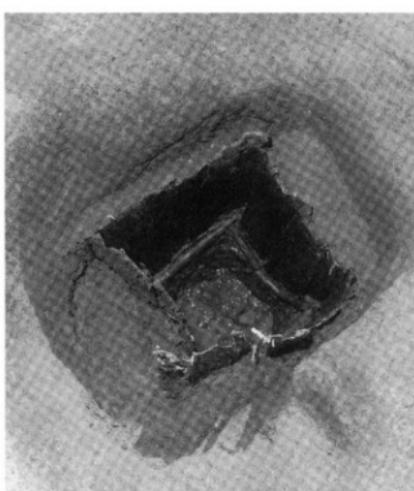
2. 同上 断面 (南西から)



3. 同上 井戸内枠



4. 大土坑 SK 8667 (北から)



5. 井戸 SE 8689 (北東から)



上 SE 8690 出土土器 下 SE 8689 出土土器



上 SE 8664 • 8665 出土土器 下 SE 8650 出土土器



46



7



47



24



27



34



38



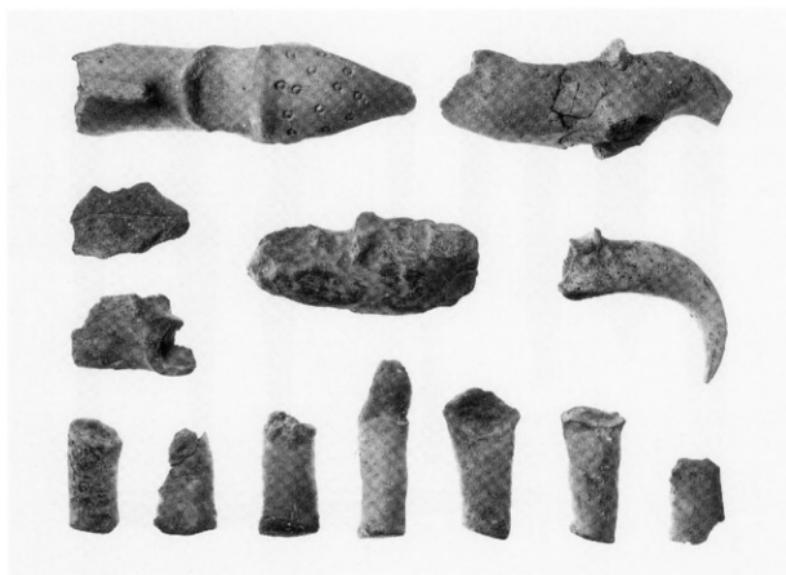
35



37



71



上 SE 8664・8665 出土土器 下 土馬



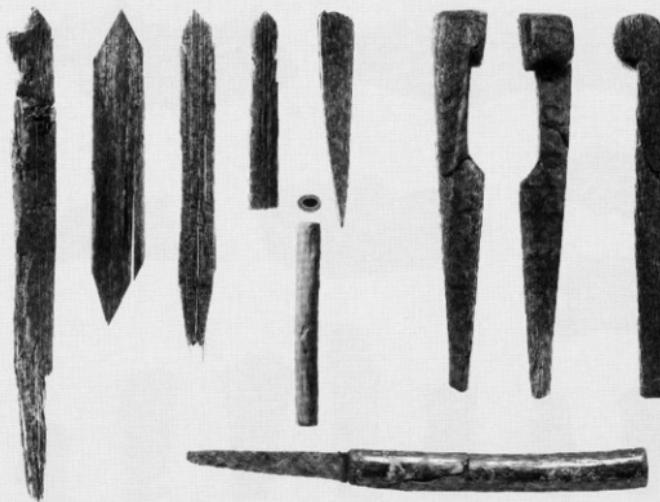
1 6273 B



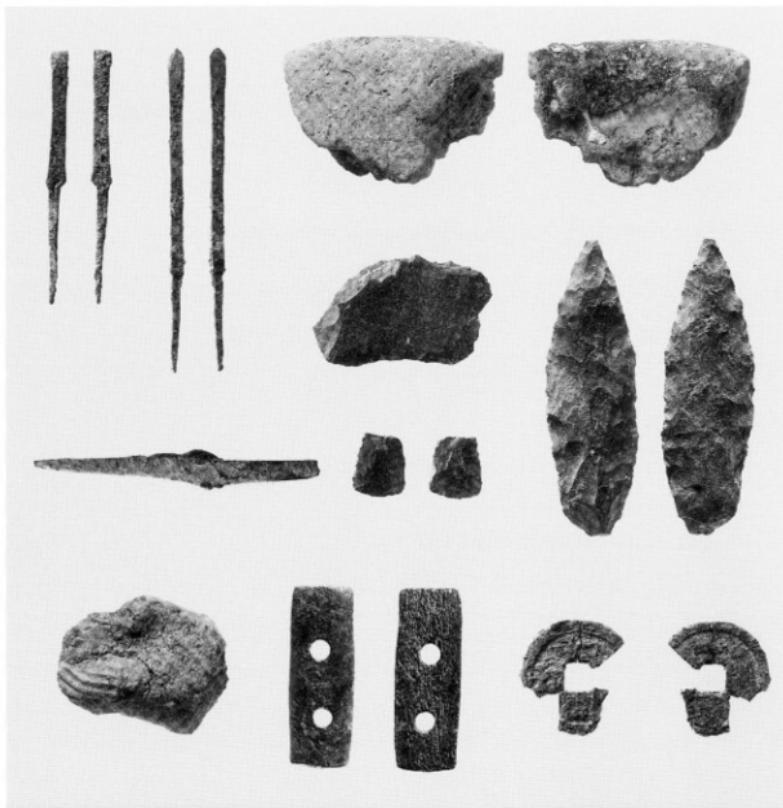
2 6641 F



3 6643 D



上 軒瓦 下 木製品及び黒漆塗木柄付刀子



金属製品・錢貨・鹿角製品・石製品

報告書抄録

ふりがな	ふじわらきょう うきょう いちじょう いちぼう はっくつちょうさほうこく							
書名	藤原京右京一条一坊発掘調査報告							
刷書名								
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	猪熊兼勝・寺崎保広・島田敏男・荒木浩司・西口壽生・毛利光俊彦・松村恵司							
編集機関	奈良国立文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部							
所在地	〒634 奈良県橿原市木の本町宮ノ脇94-1 TEL 0744-24-1122							
発行年月日	西暦1997年3月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
藤原京	奈良県橿原市醍醐町	29205	一	34度 30分 24秒	135度 48分 29秒	1996. 6.12~ 9.20	1270m ²	店舗増築 に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
藤原京	宮都	藤原宮期	掘立柱建物 塀 井戸 土坑 溝	9棟 3条 6基 5基 3条 など	土師器 須恵器 軒瓦（3点） 甕瓦（3点） 和同銅（1点） 鐵製品（5点） 木製品 鹿角製品 石製品	建物の規模は小さく、数も少ない。にもかわらず井戸が多く、鑄造工房に関わる遺物がまとまって出土した。 藤原宮期の和同銅が出土し、成分分析をおこなった。遺構の廃絶は奈良時代に降る可能性が高い。		

藤原京右京一条一坊発掘調査報告

1997年3月30日発行

編集 奈良国立文化財研究所

飛鳥・藤原宮跡発掘調査部

橿原市木之本町宮ノ庭94-1

TEL 0744-24-1122 ㈹

発行 奈良県教育委員会

奈良市登人路町8

TEL 0742-27-1101 ㈹

印刷 明新印刷株式会社

奈良市南京終町3-464

TEL 0742-63-0660 ㈹

